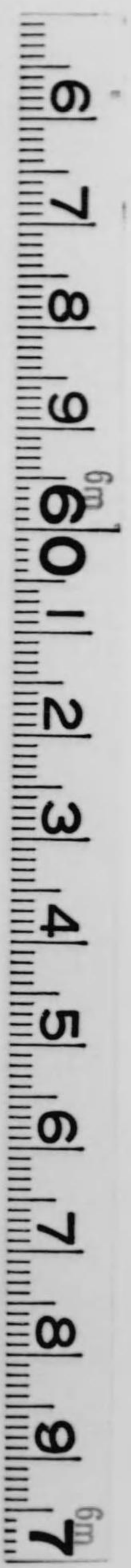


376  
229



始





2-2279

七

376-229



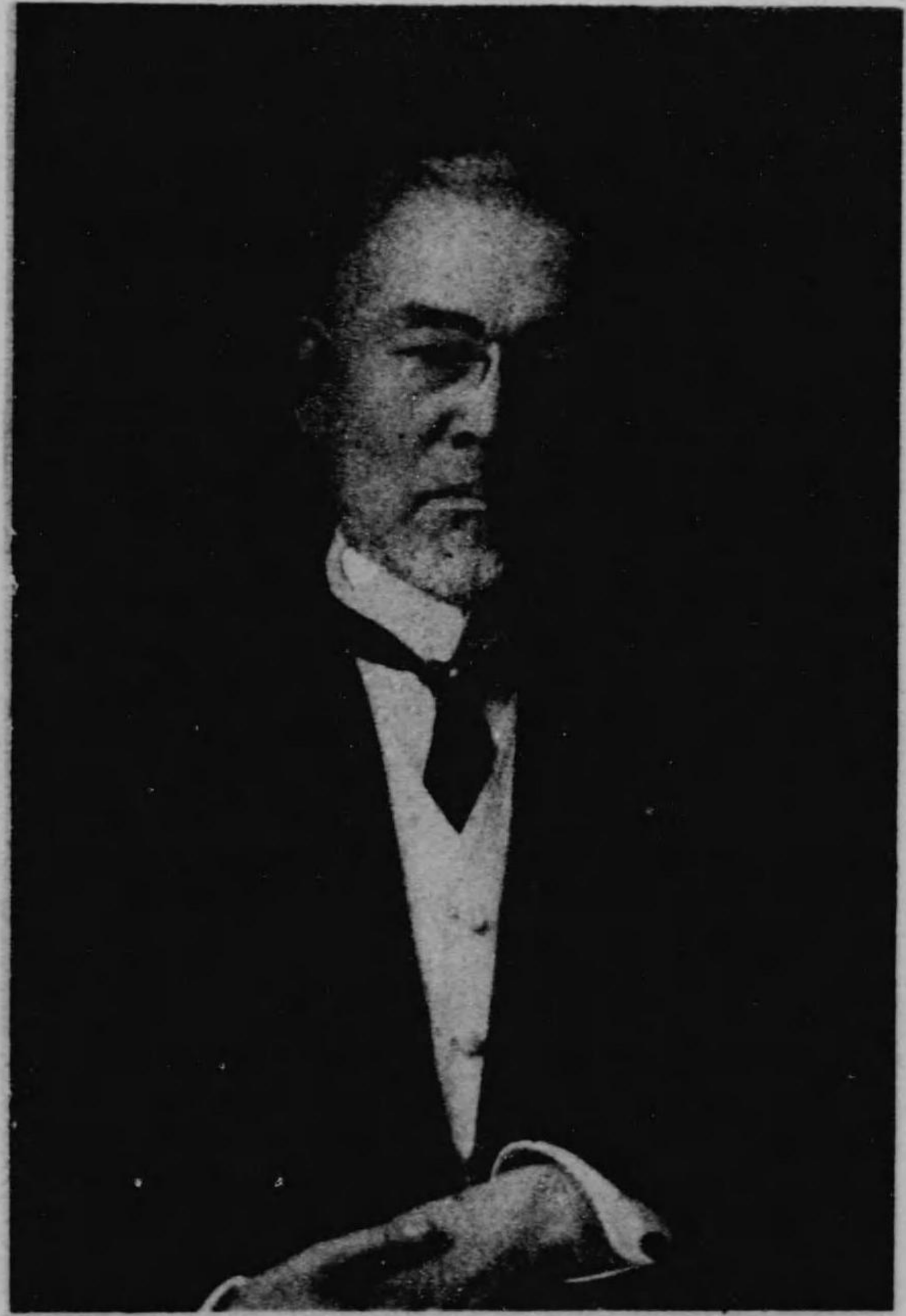
前外務大臣

後藤新平著

# 修養の力

大正  
7. 12. 31  
内交





前代主人



新養の力





卷頭言

結構な人になると相當の來歴がある。偉人と云ふ偉人の傳記を讀んで、感ずることは偉人と家庭との關係である。此の感化は所謂偉人を偉人たらしむる第一の原因であつて、男爵が今日の地位を得たのも、家庭の感化宜しきを得た結果に外ならぬのである。

後藤男爵家には未だ世間に知られない一つの家寶がある。此家寶は毎年唯一度正月の元旦、座敷の床の間に飾り付けられる、左に之を紹介しやう。

一筆申進め候學問の道は申迄無之候へども、先づ論議に辯舌能く申述べ虚文にのみ走りて枝葉に悉く日を費やし文道の本旨を失ひ孝悌忠信の道をさし置き權謀術數を旨とし加之人物の評論迄御政事の批判を致し我身を修め家を齎ふる事を度外に置き候類以ての外なる義第一正心誠意の道の本とし恭敬の義を取り失はず何分にも篤實律義の人と成立候様勸學專一たるべく候尤も朝夕の行



作もしとやかに荒々しき立振舞無之候屹度心掛申候是のみ煩慮罷在讀歌遣し候まゝ能く御勤  
考可被成候 以上

卯月九日

親より

後藤新平殿

○

劍太刀身にのみはきて何かせん

心さやかにみかけこの時

誠しく心ひとつを正さずば

千卷の文を讀めど何かせん

怠らすみかけやみかけ朝夕に

心の鏡曇りなきまで

幾度も日に願みて眞心に

爲す眞心を忘るなよ夢

都邊は梅に櫻に匂ふなり

色香をめで、道を迷ひそ

あまたある百足の足もうらやまじ

へみてふ虫の行交ふを見よ

怠らば千里の駒も何ならし

牛の歩みに身をならはなん

後藤男爵家の家寶は即ち此の手紙である。此手紙は男爵が十五六歳の頃嚴君  
から賜はつたものである。兎に角此の手紙に依つて察すれば、男爵の嚴君が、  
如何に我子の薰陶に注意されたか判るのである。男爵の今日あるは全く此の



四

薰陶の賜物で、男爵は又此の薰陶に背かざるものご云つてよいのである。  
 後藤男爵は余が最も尊敬する偉人中の一人である。今此の尊敬する偉人の説話になる「青年の力」を編纂して先年世に公にし、今又本書「修養の力」を編纂し世に公にするを得たるは、余の誠に光榮とする所である。本書中或は魯魚の誤りや、或は男爵の意に満たぬふしもあるであらうが、それは男爵公私多忙の故を以て余に於て校正せるが故である。そは重版に於て訂正する事とする。世の青年諸君が男爵の此の説話に依りて大に啓發し、且つ修養上に資する所多大なるべきを信すると共に、余が本書を編纂したる目的も亦此處にあるのである。

菊池 曉汀

目次

神心獸體論

- (一) 三十餘年前の所説今實行さる……………一
- (二) 所謂文明生活なるもの、餘弊……………二
- (三) 文明生活の幸福を享けぬは何故か……………五
- (四) 未熟の文明ヒヨロ／＼の人を出す……………六
- (五) 誤るも亦當然ではないか……………九
- (六) 神心獸體は文明生活の弊を除く……………一〇
- (七) 神心と獸體とは併せ修養せよ……………一三



○精神の弾力

- (一) 青年の典型的人物……………一六
- (二) 古聖賢と福澤翁……………一八
- (三) 成功熱と意思と……………二二
- (四) 都會化する危険……………二五
- (五) 集義和書と自助論……………二六

世の毀譽に對する予の覺悟

- (一) 社會の事業と毀譽褒貶……………二〇
- (二) 吾輩は良心の命令に隨ひ行動する……………三三

○彼も人なり我も人なり

- (一) 吾輩に對する非難は五六年間つゞく……………三三
- (二) 非難攻撃に對する態度……………三六
- (一) 天下の學生……………三八
- (二) 規則的教育と不規則的教育……………三九
- (三) 聖賢必ずしも遠からず……………三九
- (四) 個人の頭腦と手腕……………四一
- (五) 油斷は大敵兎に龜……………四二
- (六) 寶藏を開く鍵……………四三
- (七) 自己の技倆を信頼せよ……………四四



精力を保持する信念

- (一) 生理及心理上より觀た精力の増進……………四六
- (二) 精力保持の根本的要素……………四七
- (三) 斯信念ある者は骨身を惜まず働く……………五〇
- (四) 物に對しても信愛主義……………五一
- (五) 過去五十年予は此主義に依り進退せり……………五四
- (六) 予が信愛を主義とした徑路……………五七
- (七) 鐵道の改善も信愛主義の結果……………六〇
- (八) 『後藤の精力主義』とは此信念の發見……………六二

○勇氣七分學識三分の青年たれ

- (一) 嗚呼人物の缺乏……………六五
- (二) 野武士の勝利……………六六
- (三) 一難來る毎に……………六八
- (四) 學識三分に勇氣七分……………六九
- (五) 一方の血路を開け……………七〇

彈極の綆は榦を斷つ

- (一) 新智識の吸收……………七二
- (二) 浸潤の譜……………七三
- (三) 最大急行と準備……………七四

學生諸君の講究を促す



目次

(一) 講究を要する問題……………七

(二) 青年の責任……………八

(三) 世界の日本たらしめよ……………八

(四) 至誠を以て進め……………八

○真正文明生活

(一) 精神的發達の現はれ……………一〇一

(二) 現代の通弊……………一〇三

(三) 國家に對する精神稅……………一〇五

(四) 學術の進歩……………一〇七

(五) 獨逸人學術の研究……………一一〇

目次

(六) 理想的の境地……………一一

風雲兒の眞意義

(一) 風雲兒とは何ぞや……………一五

(二) 時代の產物……………一七

(三) 風雲兒の二種の別……………一八

(四) 現代の文明……………二一

(五) 眞個の風雲兒……………二四

(六) 文明の惡魔……………三〇

(七) 風雲は故なく突發せず……………三三

自治體を鞏固にせよ



(一) 強國の人民は愛郷心も強し…………… 一三六

(二) 國家と農村との關係…………… 一三七

(三) 政黨の地盤と農村…………… 一三九

(四) 地方の文化を進め經濟の發達を計ること…………… 一四〇

(五) 和衷協同の精神を發揚すること…………… 一四二

(六) 忠恕の教と共同の精神…………… 一四三

(七) 健全に身心を發達せしむること…………… 一四五

附 錄

文裝的武備論

(一) 武裝的文備を排す…………… 一四八

(一) 科學の發達と破壊力の増進…………… 一五一

(二) 軍國主義と獨逸…………… 一五三

(三) 自己を忘るゝ勿れ…………… 一五七

官僚政治論

(一) 官僚政治とは如何…………… 一五九

(二) 官僚政治の意味…………… 一六一

(三) 官僚政治の歴史…………… 一六六

(四) 官僚政治の根本問題…………… 一七三

(五) 官僚政治の本體…………… 一八三

青年處世訓



- (一) 東西文明の融和……………一九四
- (二) 平和の進程……………一九六
- (三) 最善最優の人たれ……………一九九
- (四) 勇氣と意氣……………二〇一
- (五) 日本の世界たらしめよ……………二〇二
- (六) 共同團體の道德……………二〇五

### 青年の進退

- (一) 取るに足らぬ愚論……………二〇七
- (二) 親の注文通りに行かず……………二〇八
- (三) 世の中を渡る二法……………二〇九

- (四) ルーズベルト氏の態度……………二一一
- (五) 教育の造る人間……………二一二
- (六) 青年團員の執るべき方針……………二一四

### 奮闘社會と青年の本領

- (一) 先づ自家の本領を覺れ……………二一七
- (二) 奮闘的社會と運命開拓法……………二一八
- (三) 處世の要道と宇宙の原則……………二一九
- (四) 順應同化の一大法……………二二〇
- (五) 和順と盲従を混同するな……………二二一
- (六) 余の悦ばざる教育……………二二三



○現代青年に對する注文

- (一) 身の程知らぬ青年……………二三四
  - (二) 一二成功者に憧憬するな……………二三五
  - (三) 都會的人物と地方的人物……………二三七
  - (四) 學者を拜んで居るやうでは駄目……………二三六
  - (五) 學校出身者の實力……………二三〇
  - (六) 洋行歸り羨むに足らず……………二三三
  - (七) 己れを知る者は幸なり……………二三四
- 積極主義たれ
- (一) 積極と消極……………二二六

- (二) 積極主義の代表者……………二二七
- (三) 千難萬苦と闘ふ人……………二三八

労働の變遷

- (一) 朝廷雨露の恩を布く……………二四〇
- (二) 労働尊重……………二四二
- (三) 共同連合の組織……………二四四

信愛主義の實行

- (一) 信愛主義の意義と功德……………二四七
- (二) 鐵道に於ける信愛主義の效果……………二四九
- (三) 家族的活動主義……………二五一



(四) 汗と汗を合せよ……………二五三

(五) 幸福増進法……………二五五

目次 終

修養の力

前外務大臣男爵 後藤新平

神心獸體論

三十餘年前の所説今實行さる



我輩が未だ内務省衛生局に奉職せし當時、一日余の神心獸體論について一席の講話をしたことがある。事は三十有餘年前のことであつたが、當時在青森縣長友醫學士伊東政重君は我輩の此の講話を聴き、夫れを記憶に留め、同地に養生會なるものを起し、毎日午前六時に自ら多数の子供を引率し弘前城の天守臺に登ることを勵行し、心と體とを養つて居る。先年我輩が青森縣弘前地方



に漫遊の節、當年の話を實行してゐるから、明朝參會し、更に一場の演説を天守臺上になされたし、青年の爲希望に堪へずと申來られ、且つこの四字を揮毫せよとの依頼があつた。往年の所説が實行せられてゐることを聞き心竊に愉快を感じ、乞はるゝまゝに早朝參會し、揮毫して與へたことがある。我輩の神心獸體論は斯の如き歴史を有するが、今に於て尙この説を確信してゐる。

(二) 所謂文明生活なるもの、餘弊

我輩がこの論を主張するのは、文明生活の餘弊を防ぐを目的としたのである。元來文明生活なるもの、眞髓を云へば、天意に従ひ人意を完うせんと欲するにある。然るに人間の足らざる知識を以て妄りに其欲する所を行はんとするか

ら、今の所謂文明生活なるものは天意に従はぬことが多い。即ち自然淘汰と人間淘汰との間に不權衡を生ずることが少くない。例へば水が低きに流るゝは天意である、激せしめざれば洋々として自ら流るゝのである。然るに一たび鐵橋土堤等を設くる時は動もすれば、洪水漲り家屋を流し、人畜を損し、及ぼす處の損害は無限である。これは人意を完うすることを知りて天意に従ふことを知らぬからである。無論堤防には要所に水門を穿ち、水の吐け口を設けて置くが、豪雨一たび到れば其推算と相副はず、忽ち慘害を受くるのである。是は人間の智力が假令博士といへども生々化育中の億分の一を知れるのみであり乍ら、萬事を了解せるかの如く思ひ、而して人意を完うせんとするに起る誤りで文明生活の弊と云はねばならぬ。

太古の人は水草を逐ふて生活するのが普通であつた。これが天意に従ふ人生



であるが、其後家を構へて一定の住所を定むることになつた。これは即ち人意の生存である。故に天意に従ひ人意を全うせんとすれば或は光線の透射を完全にし、空氣の流通を良好ならしめ、兩者の調和を計るべきであるが、人間淘汰によりて兩者が疎隔し合致するを得ぬ。是は今の文明生活の一大弊害である。例へば蝦夷人は水草を逐ふて其居を移してゐる。垂れ流した糞尿は風雨の爲に一掃されて清潔となり、傳染病菌が発生しても家と共に焼却し去るから、言はずに完全な消毒が行はれる様なものである。この點よりすれば下等の動物又は植物の競争に學術的衛生設備を必要とせぬのである。

又裸體であるものは雨に打たれて適當に其垢を拭ひ流されるものであるが、衣服を纏ふ時は、垢が生ずる、従つて拭ひ去らなければならぬ。之が爲には時時入浴する、入浴すれば皮膚の一部は自ら薄くなり、往々にしてその點より風

邪をひくことがある。これ皆文明生活の餘弊にして人意を全うせんとして天意に従ふことが出来ぬためである。

### (三) 文明生活の幸福を享けぬは何故か

この理論は動物を見ても明かである。良馬と稱する者は一週に一回獸醫の診療を受けさせなければならぬ。假りに何かの事情で之を放任せんとしても、診療させねばならぬ様な病氣に必ず罹るものである。又蹄にしても自然に任かすべきであるが、以前は藁蹄を打つたのを、今では鐵蹄を打つ様になつた。これは乗用者の爲に頗る便利であらうけれども、馬の天意的生活に反したことで、之が爲に馬の難儀することは少くない。人間は馬が家畜となり餌料を與へ、厩に養はれ、麗しく裝飾して殿様の前に曳かるゝを以て、定めし馬の光榮とし幸



福とすると思ふであらうが、馬としては大なる難儀を免れぬのである。これは馬ばかりでない、人間の生活にしても亦之と同じく、所謂文明生活に入ると、馬が家畜となれると均しく、天意に反することが多く、天意と人意とを調和することが困難となる。國家の行政立法も亦この生物學上の原則に基せねばならぬ。人生日常の生活より國家經營の大事に至るまで總て此原則を應用すべきである。然るに近時分析科學の發達は著しく、諸般の研究は遠心的に擴張せられつゝある。之を求心的に綜合して適當に經營せねばならぬのであるが、此生物學上の原則の攻究が未だ全く精に入らざるが爲、成熟したる文明生活の幸福を享有する域に達せぬのである。

ま 未熟の文明ヒヨロ／＼の人を出す

ま 未熟の文明ヒヨロ／＼の人を出す

今の人は寒中には襟巻をする、靴を穿く、眼鏡をかける、其他所謂未熟の文明生活なるものを舉げ來れば日も亦足らぬのであるが、その何づれよりも種々の弊害を生ずるのである。例へば足袋の如きもその一で、昔時は普通に之を穿なかつた。奥州の如き寒地にありてすらも人は多く之を用ひなかつた。百姓ばかりでない、武士でも亦穿かぬのが過半数であつた。然るに今日では總てが穿く、而してその結果として足蹠の皮が薄弱となり、少し寒い時には足から風邪をひき、海濱の砂地など裸足では歩むことが出來ぬ。かくては神心獸體でなく、獸心神體となり、足の方より漸次に消え失せんとする。

是に於て此等の文明病を豫防する爲に學生に體操を課し、少年時代より體力を練らせる、學校衛生を八ヶ間しく説き、空氣の流通、日光の透射を完全ならしめんとする、強壯法も行はるれば、衛生法も講せられ、單純な生活より複雑生



目的を以て  
目的を以て  
目的を以て  
目的を以て  
目的を以て  
目的を以て  
目的を以て  
目的を以て

活となる。昔は所謂寺小屋に數十人を集めて教育した。用ふる文字も大きく、近眼ならしめる虞もなく、而して来る者が皆強健の人々であるから、今日の様な學校衛生を八ヶ間しく説かずとも文明病に罹るものなく、而して其間より傑出した強健なる人材が出た。然るに今日は所謂文明生活に入り、學校教育も劃一的になり、總ての人間を一樣に鑄型に入れる様に教育する、恰も型で打ち出した落雁の如きものである。而して是は天狗、是はおかめと其形によりて相場を異にする様に、大學出身者も亦夫々の相場がつけられる。既に劃一的であるから、身體の強弱、能力の大小、人の力の異同に頓着する所がない、従つて弱きものは益々弱くなり、その結果は獸心神體の足許のヒヨロ／＼したものでばかり出る。教育は人材を養成する文明生活の大切なものであるが、それすらも間違ふて、今や却つて癡人養成所たるの觀がある。而して之が爲には民の膏血を絞

りながら、其用を全くする事が出来ぬのである。古歌に

しるべすと醜のものしり中々に

横さの道に人まどわすも

といふは、この間の消息を穿つたものでないか。

(五) 誤るも亦當然ではないか

天意に従ひ人意を完うするの難きことは夫れ斯の如くである。自分は幾度かこの問題に迷ふた、が人間は平たく分り易く云へば半ば神、半ば獸で、その中間に位するものであると思ふ。道義上の觀念よりすればかくあるが、科學上より研究しても亦誤りなきことと思ふ。仁義道德を説き哲理を談する人は能く一身の歴史地理即ち人體解剖を知らずして天地萬物のことを説かんとする、誤る



も亦當然ではないか。所謂一身の歴史(生理)とは生々化育の間に、胎生學の教ふる所に從ひ、生長し老衰するまでに如何なる経過を取るかを研究するのである。一身の地理といふは國土に山あり川あり地層に變化あるが如く、人の血管、神經、骨格、筋肉等が如何なる發達を遂ぐるものなるかを攻究するので、之が分らないで天地萬物を説かんとするも、生物學の原則に當倣めることは出来ぬ。自分で生理解剖を知らず、而して之を知らぬ者を輕蔑し、長袖醫者何をか爲さんなどと得々としてゐる間は、文明の眞髓は得て期せられぬのである。

(六) 神心獸體は文明生活の弊を除く

如何にして之を濟度すべきか、如何にして劇烈なる生存競争に處すべきか、之に對しては一種の悲觀説がある。所謂文明生活の弊として人は羸弱となり、

近視眼となり、齒は抜け、耳は聾し、其他の諸機關が一般に退化しはせぬかといふものもあるが、他方には所謂進化論を基として樂する者もある。樂も悲觀も共に一面を見た觀察で、六の裏が一なることを知らぬ者の言である。然るに國家と國家との生存競争に至りては近來世に云ふ民族主義なる行動が起り、民族の發展を期してゐる。この競争が極端に達するときは相互の間に武装して相見え、甚だしきに至つては軍事行動となることもある。その間に人間は文明生活の弊に陥り、動物が家畜化するが如く體力に變化を起し缺點を重ぬるに至る。世間では五尺四寸平均の徴兵が五尺三寸となり、體量の平均も低下するといふ様なことを聞いて後に驚愕し又は悲觀する、而して其の原因如何を攻究することを等閑にするに非ずや。この缺點を補ひ弊害を除かんが爲に民族衛生なるものが研究され、民族の發展に必要な健康の増進を講ずるので、其の



手段は各方面より研究せられて居る。例へば血族結婚の弊害を講じては、獨逸の皇室ホーヘンツォルレン家の如きウキルヘルム皇帝より既に十二代前の先祖迄を調べて見る時は、血族結婚を避けんとすれば四千何百人の先祖がなければならぬといふ様な調査となるが、其實五百何十人しかない。今吾人の先祖につき民族衛生學即ち將來の子孫の健全を圖る爲の攻究上より、血族結婚を絶対に避けんとすれば、耶蘇紀元後、一千九百十有餘年の今日に於ける一人の祖先は、十八ピリリオン以上の數となるといふ。一ピリリオンは百萬に百萬を乗じたもので、日本語に其數を何と稱すべきかを知らぬ。生物學の原則より攻究し來れる軌近の富國強兵の基礎たるべき民族衛生學も、餘り極端に走ると血族結婚を避くるの一事にても此の如き難事となる。而して其甚だしきに至りては肺病、癩病、梅毒の患者の如き、民族の發展を阻害するものである。宜しく早く其跡

を絶つべしとまで極論してゐる。かくては人道論何れにありや、又人道主義を極端に主張する者が愛顧の弊自ら以て害するあるに足るものにて、自分及び社會を害ふ様になるを思はぬのである。是に於て我輩は將來の子孫健全繁榮を祈る所の程度標準を通俗に了解し易く遵奉し易くせんが爲め、人は神と獸との間にありとの見地より、進んで心は神、體は獸に近うするが文明生活の弊を除くに切要なりと信じ、數十年來この説を持して變へぬものである。是實に富國強兵の本にして子孫健全の源である。

(七) 神心と獸體とは併せ修養せよ

神は實在なるや否や、佛は現體なるや否や、そんな議論は姑く之を別とし、我輩は超然的一體を想定し假りに神佛と命名せん。而して人は一生の間毎日一



度乃至數度(數分時又は數時間)沈黙思考する時は、この超自然體に接近し同化せんとすることがあると信ずる。人にこの傾あることを指して孟子は人の性は善なりと云ふたものと思ふ。故に吾人若し靜坐内省すれば、自分は神佛と何處が違ふか、古聖賢だとして我々だとして人間として別に大した差異はないと思ふことがあつてあらう。只人の天賦により努めずして自然に達するものと、努めて達するものと、努めぬ故に達せぬものとの差あるに過ぎぬ。坐禪其他の修法は即ちこの神心を養ひ、神佛に接近する所以である。併し人は神心のみを尊ぶべきでなく、心を持つことは神の如く崇高なると共に、身を保つことは獸の如く勇健であらねばならぬ。かの千仞の谿を馳り、寒熱に曝らすは即ちこの獸體を養ふ所以である。禪其他の方法により精神を養ふときは精神健剛となり、以て肉體より來る缺陷を補ふことを得、智覺銳弱となることを防ぐことを得、又

身體獸體となり、強壯となるときは、以て精神の缺漏より來る弊害を除くことを得。羅句語の強壯なる身體には健全なる精神宿ると云へるは畢竟之を指したに外ならぬ。併し之れは堂奥に入つた場合に於て始めて期せられることで、大體より云へば人が神に近づき過ぎ若しくは餘りに獸的に失するは俱に不可である。兩々相共に完全に進み以て神心獸體とならねばならぬ、これは一大事業にして獨り現代の吾々が努力すべきのみならず、子孫までが進むべき大なる目的である。國民が一致團結して、之を實現すれば茲に眞個の富國強兵となり成熟したる文明國家興り、列國間の生存競争に打勝つことを得、これが天意に従ひ人意を完うするもので、國民の對外發展も亦期して待つべしである。白人が熱帯地方の殖民に適せぬと稱するも、畢竟この調和を能くせざるに出づるので眞に憐むべきである。



## 精神の弾力

## (一) 青年の典型的人物

自分は元來青年に對する訓話などをなし得る資格を有して居ない人間である。又た今の人物中、どの人物が果して青年の典型であるかを指示することもなし得ない。何となれば、自分には今の偉人物に就て、或一部に就て感服する點は随分あるが、未だ其全人格に私淑する程の人を見出し得ぬからである。故に或一個人を指して、これが青年の典型たる偉人物であるぞと明示することは到底出来ない。が、併し單に理想で以て作り上げた人物ならばある。それは即ち正道を踏んで、如何なる場合にも他に動かさるゝことなく勇往邁進する人で

ある。苟くも此の資格を具へた人であれば、假令如何に社會の下流に沈淪して居る人でも、それを眞に景仰に値する立派な人物であると思ふ。

又世に所謂第一流の人物なるものも随分ある。この第一流の人物といふは、如何なる條件を具備した人であるかと云へば、敢て他よりの注意を受けるまでもなく、自ら自己の缺點を知る人である。現に自から自己の缺點を知れる人である。故に、世に處するに於ては能く進退節度を誤まらず、進むべきに進み、退く可きに退き、敢て其占めたる地歩を失墜することなく、機に乗じ時に應じて常に上伸するが故に、遂に一代の傑物として社會の表面に立ち長く其の勢力を維持するを得るのである。例へば前總理大臣たる桂公爵の如きは、疑もなく是等第一流中の人物である。其他山縣公爵と云ひ、井上侯爵、松方侯爵と云ひ、又大隈侯爵と云ひ皆政界に於ける第一流の人物である。財界に於ても一代に巨



萬の富をなし得たる安田善次郎、大倉喜八郎乃至平沼專藏の如きは人第一流である。又踊の師匠藤間の如きは、七十の老翁なるに拘らず、其身體の動作の自在なる、壯者も尙且つ及ばず、其疊の上に踊つて片塵を揚げず、微音を立てざるに至つては、實に驚くべきの妙技で、是亦無論第一流中の人物である。併し自分の見る所では、是等の人物を以て直ちに所謂青年の典型たるべき人物と云ふことは出来ぬと思ふ。青年の典型たる人物と所謂第一流の人物とは自から別である。

(二) 古聖賢と福澤翁

古聖賢中で、最も良い弟子を多く持った者は恐らく釋迦であらう。自分は深く宗教のことは知らぬから、宗教家としての釋迦の人物はよく解らぬが、兎も

角も多数の弟子の書いた經文に現はれたる釋迦は、殆ど完全無缺の人格で、是等の弟子の力に依つて基督と共に、世界に於て最も高等なる、而して最も多数の信徒を有する宗教の教祖となつた。基督や、ソクラテイスや、孔子の如きも、亦其行狀は弟子の筆によつて傳へられ、皆極めて立派な、殆んど超人的の偉人となつてゐる。斯く古聖賢の偉大にして高尚なる人格が、今日に傳はつて益々其光輝を放つ所以のものは、疑もなく其弟子の力が與づかつて多きに居ると思はれる。而して、弟子の力によつて今日まで、殆ど完全無缺の人格として傳はつて居る古聖賢の眞價は、果して如何なるものであらうか。例へば孔子と福澤翁とを比較して見るに、孔子の弟子三千人、身六藝に通ずるもの七十二人あると。即ち三千の弟子中六藝に通ずるもの七十二人あるのみ。今之を福澤翁が養成したる弟子、及び其學業の成れるもの、數に比するに、寧ろ孔子の

定尾新林



方が、多く劣つて居るのである。あの廣大なる邦土と多数の人口を有する支那にありて、假令交通機關の不便はありしとするも——明治初年頃までの我交通機關と支那當時の交通機關とは大差なかりしと思ふ——僅か三千の弟子と、七十二人の六藝に通ずるものを得たるに過ぎずとせば、孔子の人物の程も大抵は推測が出来るやうに思ふ。即ち必ずしも福澤翁以上ではないやうに思ふ。寧ろ福澤翁の方が孔子よりは上ではないかとさへ思ふ。福澤翁の勢力が如何に今日の我國に浸潤せるかは、其唱道せる學問の餘弊たる拜金宗の流行を見ても知るべきである。然るに福澤翁の弟子中、福澤翁を傳述すること、孔子の弟子に及ぶものなきは、果してこれ弟子の罪か、將た又福澤翁の徳の及ばざるの致す處か、我輩私かに感じなきを得ざる處である。

(三) 成功熱と意志

成功熱と意志  
 成功熱と意志  
 成功熱と意志

近時青年に成功熱を鼓吹することが流行したが、所謂成功熱鼓吹の弊は、其富を得たるものゝみを擧揚して、青年をして黄金中毒に罹らしめた點にある。成功と云ふことは必ずしも金を儲けることではないのである。肥馬輕裘、金殿玉樓に住むのみの謂ではないのである。斯かる物質的の成功を外にして、精神的の成功もあるのである。然るに、世の成功熱を鼓吹するものは全然此の精神的の成功を遺れて、物質的の成功熱のみ鼓吹したるが爲に、青年を誤ること殊に甚だしきものがあつた。而して、其反動として現はれたる精神的修養の必要を唱道する者は、これ亦極端で、殆ど精神のみを見て肉體を遺れて居る。由來人は生物であるから、其肉體を遺却しては、如何に精神の修養に努めても、



なま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
なま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
なま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

到底好結果を得よう筈がない。却つて人間としての價値を損するばかりである。  
なま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
なま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

餘りに山の奥を訪ねて

古人は既に其弊を認めて之を誠めて居る。青年が意志を鍛錬せざるべからざることは、敢て現代のみならず。凡そ如何なる時代たるを問はず、其必要を見るのであるが、生物以上より見たる文明人の生活が、野蠻人の生活に比して不自然なることは、恰も家畜の生活が野獸の生活に比して不自然なるが如きものであるから、古人は敢て意志の鍛錬を要せずして爲し得たことも、時代の進むと共に、特に意志を鍛錬せなければ、到底之れに堪へ得ない程の困難事を變化することもあり得ると思はれる。これは猶野獸が、自然に寒暑に堪へ、險阻を渡るを以て常とせるに、家畜は現に其祖先たる野獸の日常踏み來りし途を忘れて、

寒暑に堪へ、險阻を渡るに於て、野獸の如くに平氣なる能はざる如きものである。元來人間は半神半獸の動物である。——説明の便宜のために神なるものが存在すると假定する——神に屬する部分は精神で、獸に屬する部分は肉體である。而して、世の文明に進むと共に、精神の方面は——善惡共に——發達するが、肉體の方面、即ち動物としての人間は、漸次不自然の生活を營むが爲めに、却つて體力を減するが如き傾きがある。即ち人間の一半は年と共に漸次良好に改まりつゝあるが、他の一半は漸次不良になりつゝある。故に人若し人間として眞に完全のものたらんことを欲せば、其生活法を改めて自然に歸るの必要がある。人類の文明の發展は之を繼續しつゝ、生活法其ものは可成自然に近づいて後、始めて人として完全のものとなり得るであらう。斯くすれば、自から體力も強健となるべく、又意志も強固となるであらう。而して正を踏んで動かさ



るの本を養成するには、先づ意志を鍛錬して之れを鞏固のものとなせなければならぬのであるから、今後の社會に立つ青年は、可成其生活を自然にすることを心懸くべきである。

苟くも人生の大海に棹さんと欲するものは、世上の毀譽褒貶に動かされる如き薄者弱行では到底彼岸に到達することは出来ない。已に自己にして正を踏んで動かざるの信念を以て世に立てば、世上の毀譽褒貶の如きは水泡の如くに何時しか消え去つて、遂に自己の眞價を認められる時が来るものである。語に所謂「水落石出」で、水の漲つた時は石はかくれて現はれないが水の減退するに共に、石は表面に現はれて来る。自分は今日に至るまで、此水落石出主義で、終始一貫して来た。世上の毀譽褒貶を念頭に置いては、到底大事業を成し得るものではない。又大人物となり得るものではない。

(四) 都會化する危険

人間は都會化すると墮落する。徳川氏の如きも、家康が三河から起つて江戸に移るまでは、自強不息の概があつたが、江戸に移つて年を経過すると共に漸次墮落した。維新以來の薩長の如きも、亦殆ど同様の徑路を繰り返して居る。現代の貴族富豪然り、新華族亦然りである。安逸の生活は墮落の因である。人間は飽までも努力精進、進みて又進み、勉めて又勉めなければならぬ。併し世の一派の人士の如くに、愚にして自から用ゐ、今人にして古への道に背くものは困る。斯かる徒輩は自己の缺點を自から見る能はざるは素より、他より注意しても猶ほ且覺る能はざる輩で、實に世の中の厄介物である。既に古聖賢は痛く此輩を排斥した。彼等は己れを正しくすることを知らぬのである。苟くも人

僅も心に  
みよあ  
神



らしき人として世に立たんものは、先づ己れを正しくせねばならぬ。己れを正しくさへすれば、其心裡に芥蒂なきが故に、恰も明鏡に物の映するが如く、森羅萬象妍醜悉く辨別するを得べく、従つて又自己の缺點を知り、他の長所を採るを得べく、以て第一流の人物たるを得べきである。

(五) 集義和書と自助論

自分が青年に勸めんとする書物は少なからずある。就中四書六經の如き最も可なりと思ふのであるが、又一方より見れば、敢て餘りに高き程度のもを讀む必要はないと思ふ。それよりも個人々々の性格に適したる書物を讀む方が遙かに効果が多いであらう。徒らに高上難解の書物を讀むは、却つて益のないものである。自分の愛讀する熊澤蕃山の集義和書の如きは假名交り文で、誠に平

易に書いてあるから、誰れにでも解りさうなものであるが却て解らぬ。自分なども讀む度毎に異つた感じがする。三度讀めば三度、十度讀めば十度、其時の精神状態に伴ふて感應する度合が違ふ。或時讚嘆措く能はず、或時は極めて平凡に、通觀して其大の測るべからざるを思ひ、精讀して愈々其意の深きを覺える。顏淵の所謂、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前。忽焉在後。なるものである。中村敬宇の譯した自助論(西國立志篇)の如きも、其書いてあることは極めて平凡であるに拘らず、讀む度毎に其の味が違ふ。——自分は少年の時代より今日に至るまで、幾十回となく繰返して讀んだ——見る時の氣の持ち方で、平凡にも、亦意味深長にも、如何様にも取れるのである。併し、この平凡なる、又極めて穩和なる自助論中にも、所謂危険思想なるものは胚胎して居る。即ち自助論は基督教に基く平等見に立つて書いたものであ



るから、悪くすると危険思想の種となる。併し自助論を読んで、こゝに氣のつく程に、眼光紙背に徹する者ならば、自助論を幾ら讀まうが、敢て害をなさぬのである。佛教も基督教と同じく平等見に立つた宗教であるが、其平等中に差別あることが解つて居る程のものには平等見の毒に中てられることはない。基督も亦同様である。精神に弾力のない人は、如何なる思想に觸れても、容易に其弊を受けるの虞れがあるが、反之精神に弾力のある人は、決して其の毒に中てられることのないものである。而して、この精神の弾力なるものは正を踏んで動かざるの信念より生ずるものであるから、將來世に立たんとする青年は、先づ自から啓發してこの信念を養成することが肝要である。苟くも青年にしてこの信念を得て失ふことなからんか、以て眞の人として獨立獨行、社會に濶歩するを得べく、個人としても、國民としても、家庭の人としても、社會の人と

しても、如何なる職業に従事し、如何なる事務の局に當るも、十分に其任を盡すを得て、以て自己を幸福ならしめ、社會を安寧ならしめ、邦家を隆盛ならしむることを得べきである。

至誠を欲せしむるは

之修養長く道は可なり



## 世の毀譽に對する余の覺悟

## (一) 社會の事業と毀譽褒貶

男子が世に處し事を爲すに當つては、必ず世の毀譽褒貶を免るゝことは出來ぬ。手を擧げ足を動かせば、風が水に觸れて浪を起すが如く、大と小との別こそあれ、必ず社會に反響し褒むるものもあれば貶す者も出來る。これはどうしても免れることは出來ぬ。況して公事に當る政治家の如く、その一舉一動が總て社會の注目を惹き、批評の焦點となるものにおいて、毀譽は必然的に伴ひ、何人も得て免るゝことの出來ぬものである。但しその人の性質とか人徳とかいふものゝ爲めであらう。缺點も恕せられ尤められぬ人がある。併し世人

が重大の望を屬する故に、攻撃しきりなるは、その人の爲めには却つて名譽とするであらう。

譽められて喜び、毀なされるを好まぬは總ての人に通じての私情である。殊に政治家の如き、事を行ふは或程度までは人氣に投ずるを必要とするものにあつては、一身の毀譽は直ちにその事業の毀譽となり、成敗を決する原因ともなるのである。單純な私情を離れても多少考慮すべき點なきにしもあらぬ。若し此に人あり毀譽褒貶を顧みずして、私情を捨て勇往邁進せんとするものあらば、必ず自ら總理又は大統領たるを期すべきでない。其大局に意外の害を及ぼす虞れがあるからである。故に他人を總理又は首領とし、自らは次官となり次席となり、以て難を受け功を讓るの覺悟あるを要す。是れ大事に當る人に必要な要件である。



(一) 吾輩は良心の命令に随ひ行動する

毀譽褒貶に對する覺悟は人によりて夫々に一樣であるまい。單に我輩自身の場合を以つてすれば良心の命する所に従ふと云ふ一言に盡きると思ふ。吾輩も政治家として世上の人氣を受くるを喜ばぬことはない。世上の同情を受くることは、事を爲すに便利あることを知つてゐる。故に良心の命する所が一世の人氣に反することありとするも、吾輩は良心に従つて行動する。世の反對非難が如何に猛烈なりとするも、苟くも其任にある間は良心の命する所に従ふの外はない。

無論世には人氣を投することを唯一の目的とし、人氣に投する爲めにはその主義も其の良心も、之を犠牲に供して顧みぬ者もあるだらう。それは人により

て異なる所以である。併し我輩には夫は出来ぬ。假令良心に反して人氣に投じ、世の賞讃を受けたとしても、良心に省みるときは、その賞讃もたい苦痛を加ふる所以となるに過ぎぬ。之に反し假令一世の反對を受けても、自分の良心の命する所に従へば、心安く體胖にして何の憂ふる所もない。

(三) 吾輩に對する非難は五六年間つゞく

吾輩は從來此の主義で世に處し、將來も亦決して渝らぬ積りである。故に反對者からは時に攻撃を受けたこともある。攻撃されても敢て苦痛を感ずることもない。又意に介することもない。即ち氣にかけることはよいが頭痛にやまぬ様にすべし。されば今日こそ攻撃もすれ、彼等も早晚吾輩のなす所を了解し、我輩に對する誤解を一掃することがあると信じ、所信に従ふて行動して居



る。從來我輩に反對した者は一年二年間でなく、必らず五六年間は誤解され非難されて居る。見よ我輩が臺灣に民政長官となつたのは明治三十一年であるが、當時我輩の政策に對し種々なる非難攻撃を加へたものである。五六年間は攻撃の路を絶たなかつた。然るに今日は如何であるか、何人能く臺灣民政の失敗を口にし得るものがある。あらば我輩は其説を聞きたい。世界は日本の臺灣施政を以て殖民政策の模範として居るではないか。又滿鐵に對してもさうである。遞信事業でも鐵道事業でも同様である。當職にある間だけで非難賛成もなく忘れらるゝことは誠意なき輩である。世間では近頃滿鐵に對し種々なる非難を加へ、整理改革を要すると云ふものもあるが、余輩は今の組織經營を以て時代の要求に適應したものと確信してゐる。解剖調査するものがあつたならば、其缺點を發見するよりも寧ろ大に學ぶものあるを發見するであらう。

我輩は自分の最善を盡し良心が可なりと命じたことに従つたもので、攻撃も敢て意とせぬのである。而して從來の例によれば五六年の後には攻撃も非難も雲散するやうであり、ますゝ我輩をして平生の所信を堅ふせしむるのである。我輩の經驗によれば何事も今の世に反對のなきことは無き程凡庸にして利害なき業なるものが多い。中には破格もあらかなれども概して一事一物、少し群象に秀でて事をなさんには、反對を免れぬであらう。故に計畫又當初に於て極く結果の悪き時、成績の不良なる時は如何を遺算なく思料し、その進退を既に前日に決し置く時は、如何なる反對又は障礙に逢ふも、意外なる出來事として恐るゝこともなく、其の程に隨ひ各人等差を以つて毀譽褒貶に對することが出来る。これ良心命令に従つて決心する場合に忘るべからざることである。



## (四) 非難攻撃に對する態度

自分の信念が可なりと命じた方針に進むのであるから、非難攻撃されても意に介しないと言ふものゝ、うるさいことは何人も異つたことはない。丁度夏季に蚊軍の襲ひ来るやうなものである。うるさへけれども意を動かすに足らぬ。うるさへ蚊に對する方法としては蚊帳を張つて其の襲來を避けるなり、或は蚊いぶしを焼いて、その襲來を防ぐもよい。蚊帳に入つて居れば周圍に蚊々の聲如何に高くとも平然としてゐられる代りに、狭い所に小さく踞踏して居らねばならぬ。蚊いぶしを焼けば自分もいぶされるけれども、廣く緩りとされる。兩者の何れを用ふるかは人によりて一様でないが、我輩は蚊いぶしを用ひんとするものである。信念の命する所に従ひ、この使命を果すためには或は世の毀譽

を受けるかも知らぬが夫は止むを得ぬことである。自分の使命と信すれば苦にならぬのみか、煩いとも感せぬのである。



彼も人なり我も人なり

(一) 天下の學生

世の中では、學生と云へば、皆徽章附の帽子を被つて金釦の洋服を着たものと思つて居るが、それは甚だ狹い解釋だ。廣い意味から見れば、學生は常に學校に居るもののみならず、商工の子弟も、農業の子弟も、官吏も、天下の青年は悉く學生だ。吾輩も矢張り頭の白くなり懸つた學生だ。學生を此意義に解すれば、人は皆な皆なまで學生であるかも知れぬ。——これはまあ緒言だ。學生を狭い意義に解して、これを青年と見ても、また其處に二色の種類を發見することが出来る。即ち正則の教育を受くるものと、正則の教育を受けないものと

の二種類であるが、何れも學生たることに於ては一だ。

(二) 規則的教育と不規則的教育

吾輩の觀る所を以てすると、規則的教育を受けてその智能を啓發し、その徳器を成就することは、無論大に必要なことであるが、規則的教育を受けなければ、人に成れぬと云ふ理屈はない。一定の規則に従うて教育を受けず、一定の年間の修業しないものでその智能が規則的教育を受けた者の上に出てゐることもあるし、又未だ學ばずと雖も、その徳行が社會の師表となつて居る者もある。

(三) 聖賢必ずしも遠からず



それ等の點から考へると、學校教育を受けることゝ、受けないことは、別に人間たる上に於ては相異はないのである。昔から古聖の文を読み、自然の理を究めて、時に非常な發見をやつた人は、必ずしも學校教育を受けたるものに限つて居ない。今、吾輩がその恩澤に浴してゐる發明品などは、却つて教育を受けたことのない、自から發明する所の多いやうな人に由つて考へ出されて居る。これ等は畢竟、個人の頭腦と手腕とに由るのだ。と云へば、個人の力量、技能と云ふものに差別があるか、何うかと云ふ問題が起つて來る。其處だて、大に考ふべき點は。――で、吾輩思へらくだ、聖賢の遺書を読んで、その足らぬ所、その缺けて居る所を補ふことは中々六ヶ敷い。それは或は聖賢以上の人でなければ出來ない事かも知れぬが、聖賢の言を實際に應用するのは、十分普通人にも出來る事だ。この點に於て、吾輩は聖賢必ずしも遠からずと思ふ。此處だよ、

「彼も人なり我も人なり」と力むるのは。

個人の頭腦と手腕

(四) 個人の頭腦と手腕

併し人の學び得べき程度は定まつてゐる。それ以上の事は個人の頭腦と手腕とに待たねばならぬ。いくら正則の學校へ通つて、正規の教育を受けるにしても、出來ない事は矢張り出來ない。教育を受けないものでも出來るだけの事は出來る者には出來る。何ぞ恐れん、吾に膽と腕と在り、と云ふやうな人は、既に天から稟くる所があるのである。こんな奴に學問をさせれば、鬼に金棒だ、覆載問及ぶ者なし。併し、天稟の秀でた腦と、優れた腕とを持つてゐない者でも、何にも落膽するには及ばぬ、大概の事は勉強すれば遣れるものだ、精神一到何事か成らざらんやで、後鉢巻でやれば、出來ない事は天下には少ない。



(五) 油断は大敵兎に龜

天稟の才能ある者は、動もすると、鼻を蠢めかして天下に及く者なしと意張るが、斯うして油断をしてゐると後れて了ふ。油断は大敵だ、足の疾い兎はよちくと歩く龜との競走に負けたと云ふ譬話があるではないか。所で天才のある者の趣く所も、その少ない者の趣く所も、つまるところは同一だから、いくら天才だといつて棚から牡丹餅を夢想してゐては駄目である。何うせ行く所へ行くのだから、成るべく正しい、間違のない道を歩むのが可い。此の點に於て、規則的教育を受くることが必要だ。一定の時期に於いて、一定的教育を受け、規則正しく秩序を立て、學ぶのは、徒勞を省く上に於て効果がある便宜がある。故に吾輩は規則的教育と云ふことには賛成する。

(六) 寶藏を開く鍵

が、人は悉く正式の教育を受けねばならぬか否かは疑問である。吾輩以爲らく、天地間は一種の寶藏である、壁厚く、錠堅し。中に何物を藏するかは知らないが、貴重品が澤山納つてゐること丈は事實だ。時々、燦爛たる光明が洩れて来る。併し扉を開かねば、その何物であるかは分らぬ。正式の教育は、つまり、如何にして此の寶藏を開く可きか、を教ふるものである。併し教育さへ受けければ、誰れでもこれを開くことが出来るかと云ふに、爾う安くは店で卸さな。無論、一定の年限の間、一定の教育を受ければ、寶藏のあることが知れるのみならず、その中に何物かわからぬが、光彩陸離たる貴重品の入つて居ることが知れる、そして鍵さへあればその扉を開くことも出来る。併し、如何にし



て開き得るかは分らぬ、分つても實際に開くことは出来ない、此處が極めて肝腎な處だ。

(七) 自己の技倆を信頼せよ

累ねて云へば、正式の教育は、加何にして天地間の寶藏を開くべきかを教へる。併し、教育を受けたといつて必らずしも開き得べき力はない。無論、誰でも或程度以上に開ける鍵は持たぬ。此の秘密の鍵は必らずしも正式教育を受けたものが持つて居るのでなく、多くは非常なる苦辛を嘗め、非常なる工夫を凝らして、自からそれを製造したものである。即ち秘密の鍵は各人の技倆に關してゐる、開けると開けぬとは頭次第、腕次第と云ふことに成る。自己の信頼し得べき技倆を養成することの必要なるは、全くこれが爲である。然るに今の青

年は、凡べて自分でやるといふ心がなく、何でも彼でも人任せ、進んで自から取り、自ら獲やうとはせぬ。少し障害でもあり、防碍でもあると、直ぐこれでは堪らぬと云つて悄氣返る。こんな事では到底何事も爲し得らるゝ者でない。貧苦と窮乏の裡に在つて勇戦猛闘し、自己の技倆を磨き上げて、寶藏を開くべき秘鑰を自取自獲することを心懸けねばならぬ。寢て待つて居たとて果報は來る者でない。自取自獲の勇猛心、これ獨立の足を大地に踏みつける鞏固の基礎である。されば、將來、第二の國民となつて、社會の表に活動すべき青年は、若い中に此の勇猛心、此の獨立の足を大地に踏み附ける鞏固の基礎を造る事に心懸け、年を老いてから間誤ついたり、後悔せぬやうに準備をして置かねばならぬ。



### 精力を保持する信念

#### (一) 生理及び心理上より觀た精力の増進

精力主義といふことに關しては、定まつた意見として世に發表する程の材料を有たぬ。元來精力といふことは、生理學よりと、心理學上よりと併せて研究すべきもので、健康なる精神は健康なる身體に宿るといふ故、體操とか深呼吸法とか其他生理的に健康を良好にする途を工夫する必要もあらん。又科學上よりは精力の由來、その發理の状態を研究し、以て之を増進する修養を積まねばならぬ。

之を生理學及び心理學より研究すれば、趣味も多く有益であると思ふが、併

し我輩は今も云ふ通り、未だ化學的に之を研究して居らぬ。只精力主義は人が世に處する上に於て、極めて主要であることを信じてゐる故、我輩が平生確信し、信仰してゐる事柄を述べ、以て精力の増進を修養せんとする青年の參考に供したい。

#### (二) 精力保持の根本的要素

我輩は禪のことには全くの門外漢であるが、聞けば頓悟頓入といふことがあり、修養を積む間に、一旦豁然として悟入するといふ。事の眞偽は、我輩之を知らぬけれども、信仰の大切なることはこの一事にても能く了解されると思ふ。精力を修養するにも、この信仰の力が最も大切である。

精力修養に必要な信仰とは何であるか、自分は信愛の情即ち誠を無盡藏に



有つて居る。いくら出しても減るものでもなく、又無くなるものでもない、又いくら他に施しても自分には損することのないものであるといふことを充分に會得し、且つ之を信念とするのである。この信念を有して、日常の業務に當ることにすれば、渾身の精力がその業務に發揮される。

この信念があれば、如何なる非難、攻撃、嫉妬、中傷に遭ふとも怨むこともなく、憂ふこともない。又如何に賞賛せられたともそれに乗つて安んずることもない。唯だ自分は自分の誠意に問ふて、誠意に恥ぢざれば足れりとするのである。あれだけ親切にしてやつたのに、彼は何とも思ふてをらぬ、禮も云はぬ、彼は不都合だといふは、大間違ひである。信愛は相對的のものでない、絶對的のものでなければならぬ。自分は無盡藏に親切を有つてゐる。いくらでも他に盡すといふ覺悟が必要である。之を忘れて、その盡した親切に對するだ

けの感謝の報酬を受けないのに、不平を起し煩悶するが如きは、是れ商賣上の親切にして算盤ヅクの信義といはねばならぬ。親切を賣つて剩錢を取らうといふものである。かゝる人は實に氣の毒なもので、最早將來に望なき人である。

この信愛主義に確實であれば、諸葛孔明にあらざるも、成敗利鈍の如き、毫も頓着するを要せなくなる。成敗利鈍、利害得失に心を置かぬといふことは、大變に難かしいことであるが、この信念さへあれば、そんな性能も期せずして自ら出來て来る。己の信義愛情なるものは無盡藏のものである。これが爲めに身體を勞しやうが、心神を勞しやうが、固より報酬は求むる所にあらざるといふ信念が確實である以上は、如何なる非難攻撃に對するとも、又世人の誤解に對するとも、少しも憂ふ所なく、又怨む所なく、己の本分を盡して勇往邁進することが出来る。



## (三) 斯信念ある者は骨身を惜まず働く

この信念ある者は心身を勞するも報酬を得んとするのではなく、只自分の本分を盡すといふに止まる。故にこの信念あるものは一事業に従事しても、骨身を惜まずに事に當ることが出来る。一人で二人の働をしたから、其報酬も亦二人分でないならばならぬと思ふても、さうならぬ時は、不平も起れば煩悶も生じ、而して或一事業に全精力を注ぐことが出来ぬ。斯の如きは信愛の無盡藏なることを信せぬもので、心得違ひの最も甚しきものである。

無盡有餘の信愛を藏するの信仰なく、報酬專一に煩悶する人は『なめに俺はそんなに餘計に働かないでも可い、時間だけ役所に居れば可いのだ、雨が降つたら虚病して寝て居るが可い、時計が鳴つたら、早く歸つてズボラをした方が

得だ。いくら働いても、椽の下の方もちでツマラない。働くだけ損だ」といふものがある。これは人間の身體は使つて損のゆくものでないことを知らぬ人の寢言である。斯る不健全の思想を有する人が國民の多数を占むるに至れば、國家には禍根を遺し、その人の事業は破滅してしまふ。

或は取るものゝ多少で働を異にするといふは、近代文明の然らしむる所といふかも知らぬが、それは文明の誤解である。足輕も家老も均しく一朝有事の際には、君の御馬前に討死するのが日本武士道である。この崇高なる献身的精神が即ち日本文明の精華である。この精神の活動する所に、他の難しとする大業を成し遂げ、極度までも其精力を發揮することが出来る。

## (四) 物に對しても信愛主義



信愛主義は人に對するのみならず、物に對しても同じく信愛主義でなければならぬ。時間を惜しむ勤勉忍耐も、勤儉節約も皆此に淵源する。人に對する信愛は多くの場合に於て相當の反動がある。人に親切を盡せば、多くは先方でも衷心より喜びの意を表する。人に對する信愛はその必要も解り易く、又盡すことも比較的容易であるが、物に對して親切なることは、甚だ困難なるものである。併し物に對して親切なるに至り、初めて信愛主義が全ふせられたものと云へる。例へば鐵道の驛員の仕事に就て云へば、老人や小兒を助けることばかりが親切主義ではない、これも勿論かくしなければならぬが、口もなく、手もなく足もなく、心もなき所の貨物に對しては、猶一層の注意を以て取扱はねばならぬ。如何に粗末に造られた貨物でも、如何に汚い貨物でも、人を大切に取扱ふと同じやうに、貨物も大切に取扱はなければならぬ。又石炭を焚くにして

も、別に用のない時から投入するとか、又は車に油を注すにしても、加減なしに注すとかして、必要以上に無益に消費するは皆物に對する信愛主義を缺ける當めである。

其他筆墨紙の如き些細なものに就て見ても、それが銀行會社若くは官廳の品物であれば、その品物に對する信義を缺き、措げもなく亂費し、一枚の紙で足りる所に二枚を用ふる。自分の物ならば一枚でも大切に取扱ひ又は使用するものでも、他人のものと見れば、無駄費して後悔せぬ。此等も亦物に對する信愛主義を缺けるものである。我輩は敢て惜んで使ふなといふのでない、必要があれば、いくら使つても仕方がない。只物に對する信愛の自然の結果として費用を節約する所に價値があるのである。金額の多少をいふのでなく、この主義實行の結果であるや否やを念とする。



かく自他の物を愛し、親切丁寧を盡して得たる節儉は、信愛主義より起つたことが分る。かゝる氣風によりて養成された人々は、若し故あつて他の事業に従事するに至つても、この修養から得た靈のみは各自の身體から少しも離れない、眞に各自の寶となるのである。人は骨惜み力惜みをせずして、何事にも全力を傾注して惜むことなきに至り、始めて信愛主義の妙所に達するのである。私人の事業は儉約に經營せらるべきも、株式若くは公共的、否官營は不經濟となるべしと、公言憚らざる惡徳無恥の卑劣漢は、共に此等の妙味を談するに足らぬのである。近世的、否半西洋風に通じたりとする惡性ハイカラ流の有識無徳の徒には此説は耳に入らぬであらう。

(四) 過去五十年余はこの主義により進退せり

我輩五十年間の生涯は常にこの信念に基き、二三人分の仕事を成して來たのである。空論ではない。是は自ら衣食しつゝ、學問せねばならぬ境遇から自然に起つたことでもあつたが、自分は主義として二三人分の仕事に従事してゐた。我輩は骨身を惜まず、報酬を求めず、人と我とに對して信愛を盡すべきものなることを感じてゐた。我輩が他から學資の供給を仰いだのは一年半ばかりで、其の後、須賀川醫學校の生徒取締を申付けられ、月給三圓を受けてから、今日まで常に何か仕事して俸給を受け、全く扶持離れしたのは相馬事件に連座した時の半年のみである。

我輩が須賀川にゐた時は、内外舎長としての外に、研究生として病院の手傳もするし、尙一面には普通の生徒として講義を聞き、一個の身體を以て優に三人前の仕事をした。同校卒業後は名古屋に赴き、愛知病院の當直醫員となつ



て患者の治療に従事し、附屬醫學校の訓導を兼ねて受持の學科を教授し、尙其外に同校の備教師であつた西洋人に就て醫學の講義を聞き、夜は司馬凌海に従つて獨逸語の稽古を始め、一人で三四人分の仕事をやつてみた。内務省に移つても、臺灣に赴任しても常に同じ事で、自分は信愛主義に基き、地位の高下、俸給の多寡などに拘らず、常に出来るだけの精力を發揮してゐた。我輩が遞信大臣に就任し、鐵道院總裁の激務を兼任しながら、尙拓殖局副總裁を兼ねたのを見、一部の人は、後藤は政權の收握に吸々してゐるとか何とか非難したけれども、それは我輩の過去を知らぬもので、我輩は須賀川時代より信愛主義に基き、この修養を心がけたものである。大臣になつて徒らに政權關係の大を望んで、始めて行ふたのではない。

無論須賀川時代より我輩が三四人前の仕事をすることを、非難を加へたも

のもないではなかつた。攻撃は必らずしも三要職を兼任した時に始まつたことではない。併し我輩は信愛主義に基いて進退するので、世間の非難攻撃などには全く意を止めぬ。自分の至誠に問ふて恥ぢないことであれば、飽まで本分を守つて邁進した。犬も歩けば棒に當る。多少の非難を受けること位は致方のないことである。非難や攻撃を受けるのが怖ろしいならば、チツと避けてゐるに優つたことはない。併し我輩は天の我を此世に生じたことは決してチツとして居れといふのでなく、出来るだけの仕事をせよといふのであらうと想像し、且つ確信を有つてゐる故、非難も敢て憂とせず、且つ激務に當つても常に之に堪ふるだけの精力が続くのである。

(五) 余が信愛を主義とした徑路



然らば此信念は最初より懐抱してゐたものかといふに、必らずしもさうでない。自分は之を行爲に現はしてゐたのが先であつて、之を言にしたのは寧ろ後である。今にしてこの信念の由来を考ふれば、須賀川時代に發芽し、名古屋に赴いて後、愈々確信となつたと思ふ。我輩が須賀川で最初に受取つた辭令は生徒取締といふのであつたが、後に舎長となり、尋で外舎の舎長を兼ねることになつた。當時醫學校の寄宿舎には内舎と外舎との二があり、内舎は十七才以上二十四五才位の普通の學生を收容し、外舎は福島縣廳が管内の開業醫に對して日新の學術を授ける爲に、選抜した官費生を收容したのであつた。故に外舎の生徒は生徒といふものゝ、家に歸れば妻子もあれば塾生も置いてゐる立派な一家の主人で、我輩に比すれば何れも年長者であつた。年少の我輩が此等の人を統御し、紊亂したる風紀を矯正せんとするには、尋常一様の手段では出来

ぬ。現則や命令で抑へんとしても、反抗こそすれ、圓滿なる取締は出来ぬ。至誠を以て彼等に接するの外ない。心の至誠を以てすれば、必らず相手を動かすに違ひない、假令我輩の爲す所に隙があつたとしても、至誠に發したことであれば、乗せられる虞はない。かう思うたので我輩は至誠を以て内外舎生に接した。幸にして舎生の風儀も頓に改まり、我輩に對する不平も餘り起らなかつた。この經驗があつたので、名古屋に赴任した後も、段々と信愛の情を以て人に接し、信愛主義が人を動かし、自分の全精力を發揮し得るものなるを感じ、終に我輩の一主義として爾來之を操守するに努めてゐる。至誠息むなしか、至誠神に感ずとかいふことを、少年時代に讀んだことがある。當時は深く其意を味ふたこともなかつた、従つてこの言に従ひ修養した譯でもなかつたが、自分が信愛主義を以て人に接してゐる間に、自然にその味



も解り、後に之を読み、始めて其妙味を解するを得、孔子ならぬものでも、之を行へば必ず對手を動かす得るものなることを泌々と感じ、益々人と我とに對する信愛の大切なることを感じてゐる。

(六) 鐵道の改善も信愛主義の結果

遞信現業約十萬人、鐵道院約十萬の現業員は最近に著しき相違をした。客に對する態度が一變したといふものがある。是れ或は我輩に對してお世辭をいふのかも知れぬが、我輩は自分の實驗に徴し、信愛主義の信念を強くし、その中より妙味の存する所を發見し、之を公私の間に利用したならば、その從事してゐる事業の爲にも、又各自の一身一家の爲にも、必らずや幸福の種子を蒔き、やがて美しき花を咲かし、實を結ばしむることが出来ると思ひ、在職中は部下

に對し遞信氣質、鐵道氣質の養成を鼓吹し、一たび鐵道の門、遞信の門を潜つた者は、總てその感化を受け、一般にその氣風を養成するに至れば、始めて全體の圓滿なる活動を見る事が出来、而して世人をして、あの人は鐵道に居た人だから、俺の方に使はう、あの人は遞信に従事してゐた人だから、俺の方へ頼まうといふことになるといふてゐたが、お世辭かは知らぬが、遞信氣質、鐵道氣質を認めらるゝに至つたのは、我輩の大に喜ぶ所であり、又至誠の人を感應することの大なるに驚かざるを得ない。

至誠神を動かすといふてゐる。神さへ動かす力があれば、人を動かす位のこととは何でもない。併し至誠に出たる言行でなければ、力がない。他を動かすことも出来ねば、感應を興ふこともない。只口先で言を卑ふしたり、對手の氣に入る様なことをいふて、人望を收めんとしても、それは駄目である。誠意が



籠つてゐなければ、内外の攻撃非難を受けて平然たることは出来ぬ。街ふことは既にこの信念なきを示すものである。物に對して陰日向があれば、安心する所なく、自ら信する力がない。故に僅の非難攻撃を受けても、直ちに屈して了ふ。至誠神に通ず、人に對すれば人を感應し、物に對すれば物ごとに動く、お世辭なさらも、鐵道の多少改まつたといふは、至誠の力であらうと信じてゐる。

(七) 『後藤の精力主義』はこの信念の發見

我輩も出来ることなら勉強よりも怠惰を欲するものである。是は皆てピスマルク公の言として聞きし處なるが、何人でも異つたことはあるまい。然るに世には『後藤は精力主義だ』と稱するものがある。無論お世辭に諂ふのであらうとは思ふが、又全く諂ふ必要のない人までも、こんなことをいふものがある。

我輩は敢て精力主義たらんと欲しては居らぬ。只常に人に對し物に對し信愛主義といふ信念の下に動いてゐるのである。自分で無盡藏に有つてゐるものを、報酬なしに施してゐるのである。故に人に對しても物に對しても陰日向せぬのである。自分の力に堪えるだけのことは常に爲すことに努めて居る。これが即ち世人の目に映じた『後藤は精力主義』といふのであらう。この後藤が精力主義なるのでなく、一の信念に基いて進退することが、發して精力主義と見えるのである。我輩でなくとも、何人でも苟もこの信念に基いて動けば、程度の相違はありとも、必らず其全力を發揮することが出来る。非難や攻撃があつても厭までも其本分に邁進することが出来る。我輩を評する精力主義がこの意味でありとすれば、即ち何人でも亦精力主義者となり得ると信する。

我輩は精力主義に就て研究中である。科學的に意見を發表することは出来ぬ



が、自分の實驗上より此信念の大切なことを世の青年に告げたいのである。

### 勇氣七分學識三分の青年たれ

#### (一) 嗚呼人物の缺乏

ナポレオンは「一に金、二に金、三に金」と謂へる由なるも、吾輩は之に反し常に「一に人物、二に人物、三に人物」と絶叫して止まない。吾輩は之の叫びを六七年前慶應義塾に於て演説した事もある。日本帝國の文化の程度も既に充實して来たかの感がある。此時に臨んで唯々残念至極なのは人物——偉大なる人格——古人に匹敵すべき偉人物——の出現しない事である。或者は小心翼翼として活動を望まぬ、或者は孜孜兀々として徒らに財貨を蓄積して以て能事了れりとして居る、或者は醉生夢死の日月を空費するに掛つて居る。中には虚



僞と罪惡とを以て自分の本領と心得て居る者さへ在る。之れ果して何人の罪であらうか、先輩の能く後進を教導して行かぬ罪もあるであらうが、實は青年其者の罪である。一朝にして風雲の機會に乗るごいふ事は固より今の世に有り得ない、それは幕末から維新前後に掛けての戦亂時代の夢である。併し乍ら果して現代は卓絶した青年の活動を阻止して途前に障害を置くやうな馬鹿な事があるであらうか、我輩は「否」と斷言するを憚らない。

### (二) 野武士の勝利

ナポレオンが嘗て『勝利は最後の五分間に有り』と叫んだのは有名な話であるが、畢竟世間は『根』の勝利である。ウンと踏耐へさへすれば必ず勝利の月桂冠は得られるが、士俵際になつて脆くも一敗地に塗れるやうでは終に平凡に終

つて仕舞ふ、之れは即ち渾身の勇である。現代青年は學識に於て事務的才能に於て決して昔の々人に劣らない。但、勇氣と霸氣を缺いて居る。故に幾い學識が豊富でも才能が卓絶して居ても之を行ふの途がない、途が有つても實行すべき勇氣がない。史を讀んで何人も感ずるのは天下を風靡した英雄豪傑といふ者は皆草莽から崛起した野武士ばかりである。彼等には長袖者流の學識もいもない、時としては戦略すらも知らないのである。が、最後の勝利は此の荒武者の腕に落ちて來た。今の青年にして野武士的の勇氣に富み、而して秘蘊蓄した學識の運用に力むる所あつたならば、夫れこそ鬼に金棒といふ可きで、要するに人物の凡偉の岐るゝ所は勇氣の多少にあつて存するのである。

### (三) 一難來る毎に

OS

No No



經驗は前途に突進すべき勇氣を養成する。少し位の苦い經驗を嘗めたからと  
 いつて悲觀するやうでは到底駄目である、反撥心を奮起せしめて一難來る毎に  
 勇氣百倍するの覺悟を定めねばならぬ。勇氣の點に於て、吾輩は現代青年諸君  
 と相對して勝らすとも敢て劣らざる丈けの自信が有る。吾輩は極端から極端に  
 飛廻つて苦難を閲してゐる。少年時代は随分人知れぬ苦心もしたが、一日と雖  
 も濟世利民の志を忘れるやうな事はなかつた。彼の相馬事件の如きは又大に  
 心膽を練るに與つて力があつた。憤然として怒を發す可き場合にも能く忍耐し  
 能く抑へたが、爲に一層奮起するのを常とした。『義を見て爲さざるは勇無き也』  
 とは古人の言であるが今日の青年の眼中には利益問題を除、の外義理も人情も  
 あつたものではない、況んや凜々たる勇氣に於ておやである。

と云ふ事だ

(四) 學識三分に勇氣七分

人の成功の傳記を繙くに當つては先づ誰も其の先輩の感化とか祖先の門地と  
 かを詳細に研究するが、之は愚な語である。如何に門地を有し、立派な教導者  
 を得たとしても、自家一身の勇氣の如何に依つて將來の運命が決せられる場合  
 が多い。英雄の子に英雄なく、大政治家の子に大政治家は出でない、偶々有る  
 にしても、夫は極端な例外に過ぎぬ。焉んぞ知らん萬人の先頭に立つて萬人の  
 統治者たる可き人物は却つて賤が伏屋に呱呱の聲を揚げた徒輩である。即ち偉  
 人は先輩の感化や家門學問を超越して居る。故に古今の英雄奮闘史は一篇の貧  
 兒成功譚とも見る事が出来る。如何に馭者が精練でも、手飼の馬は野放しの奔  
 馬の精悍に及ばないのと同理で、天真爛漫獨立不羈の精神の中に人と爲つた青



年ほど覇氣満々で氣持の宜いものはない。此處に學識七分、勇氣三分の青年と、學識三分、勇氣七分の青年とありとすれば我輩は寧ろ社會に向つて勇氣の勝りたる後者を推薦するに憚らない。

(五) 一方の血路を開け

先輩の前に出てもピクともせず、頭から呑んで掛つて、而も條理整然として理論責めに堂々と詰の掛ける青年に接した時は、何となく衷心非常に嬉しさを感ずるが、今の世にはそんな青年は到底見出す事が出来ない。吾輩は常に青年諸君の爲に叫ぶ、『先輩でも何んでも構はずドシノ、突進して自分の力量を鍛錬せよ、社會は空位を擁して諸君を待つては居ない、必ず一方に血路がある、其血路に向つて全力を傾倒した者は遂に敵陣に躍り込む事が出来る』と、畢竟す

るに勇氣の問題である。大學は勇氣を造らない、勇氣は諸君の腕にある。



### 彈極の綆は幹を斷つ

#### (一) 新智識の吸收

世の中には、雑誌などを子弟に讀ますのを忌がる父兄があるが、其處は大に考ふべきところである。讀んでも何等の利益のない、却つて害になるやうな雑誌なれば、勿論これを讀むことを禁じなければならぬ。けれども有益な、知識の啓發と品性の修養とを授けるやうな雑誌は、むしろこれが精讀を慫慂しなければならぬ。否積極的に讀むことを命じなければならぬ。

雑誌は教科書のやうに即効のあるものは少ないが、一月二月三月と重ねて讀んで居れば知らず識らすの間に智識を啓發し、品性を修養して、大なる利益を得るものである。義務教育は飯である。食はねば生活の出來ぬ如くに、受けねば國民として立つことは出來ぬ。社會教育——その中の一たる雑誌教育は、恰も温泉の如きものである。浴らすとも濟むことは濟むが、浴つて居る内に身體の調攝が巧く行はれて、獨り身體のみならず、精神状態も健全になる。

#### (二) 浸潤の諧

『浸潤の諧』とは、ぼつ／＼悪口を吐くと、深く／＼浸み込んで、彼の人には本統に悪い男だと思ひ込んで了ふ、と云ふ悪い方の格言だがこれと正反對に『彈極の綆は幹を斷つ』と云ふ格言がある。この言は『泰山の雷は石を穿つ』と云ふ言と對句で、昔技乗と云ふ人が、吳を諫める時に用ゐた言葉である。即ち釣瓶繩でも井桁を斷つて了ふ——微少なる力も積めば大功をなすと云ふ意味で、



わが國の俚諺の「塵も積れば山となる」と同一の意味である。誰しも味はねばならむ言であるが、動もすれば意志薄弱に陥り易き青年に取つては、殊に襟を正して聴かねばならぬ言葉である。

(三) 最大急行の備準

最大急行列車式——即ち所謂『突貫主義』處世上有効な遣り口ではあるが車輛も軌道も悪く、油が十分に注いでなく、運転手が不熟練であつたならば、到底全速力を出して駛走することは出来ない。全速力を出し得るやうにするには、幾多の備準と幾多の設備とが必要である。人間もそれと一所で、力のないものが無暗に突貫した所で何にもならぬ、所在敵を受けて中途に倒れる、敵が居なくても先づ自から息が切れて僵れる。身體と精神とを二つながら養つて、

平生から餘裕を作つて置きさへすれば、どんな障害が現はれても、造作なくそれを突破することが出来る。然らば其餘裕力は如何にして養ふか。言ふまでもなくそれは青年時代に養ふべきものである。

吾輩は萎靡して振はざる青年を憎む、かくの如きは國家社會の蠱毒である。けれども猥りに突貫する青年を戒む、かくの如きは猪勇である。青年時代——死ぬまで青年の心持でゐなければならぬは勿論だが——所謂『青年時代』には、修養と云ふことを主にせねばならぬ。目には見えず、耳には聞えぬが、綆が幹を断つ程の決心で、鬱憤蓄積せねばならぬ。進むことのみを知つて、力を養ふことを知らぬ輩は猪勇として深く之を戒めねばならぬ。蓄積の名の下に因循姑息を事とし、齷齪として日を送る輩は、怯懦として激しく之を勵まさねばならぬ。吾輩は『學生』の諸君に向つては、切に此の綆を断つ幹の覺悟を持



つて修養を積まむことを、勤めざるを得ぬ。

## 學生諸君の講究を促す

### (一) 講究を要する問題

今學生諸君の講究を願ふべき問題は實に多々あるのであるが、今は其の一二に就きて諸君に題目として提出し、以て諸君の講究を煩したのである。

私のやうに變則的教育——最も不完全なる教育を以つて経過しました者が、諸君の前に出て斯の如きことを申し述べると云ふことは、實に雪の上に霜を添へるやうなもので何等諸君に益する所がなく、又諸君にとつても聞き苦しいことであると思ふが、併し私は左様には感じない、何故かと云ふに、語る者拙くも聞く人聰明なる時は其の間に得る所至らなくとも、諸君は之を御聞きになつ



て全きものと爲すことが出来ると思ふからして、無遠慮に話をして宜しいと言ふに至つたのである。諸君は如何なるものであつても——例へば芥溜の中から拾ふたものでも——之れを非常に有益なるものにする事の出来るのは即ち教育を受けられたからであると信するのである。斯の如き希望の下に學生諸君に望むことを申述べやうと思ふのであります。私は今日政黨の落伍者として、政黨を脱し、來つて何等か時事問題——今日の講究すべき問題——として此の諸君の助勢を借らんがために政談をするのであらうと思はれるのであらう。しかしながら斯の如きことは私の希望ではない。折々此の法科より演説者を招聘したるがために圖らざる罪に座せられたことを聞いて居ります。斯の如き迷惑を掛けることは決して私の希望ではないのであります。古より『口は禍の門』と言ふ。而しながら口は禍の門であらうとも、亦禍の門となるにしても、之

は其の人々の境遇に依つて生ずることであつて、古より此の諺と云ふものが、あらゆる場所あらゆる時代を支配するとしたならば、——若し事實口が禍の門と云ふならば、各學校に辯論部などは無い方がよい……。今此所に申述べやうと云ふ事柄は、學生諸君の將來に負擔せらるべき責務に對して申述べることを必要とするのであります。寧ろそれよりは其の責任を擔ふて一日も忽にすべからざる所の問題にして、恐らく一生必要とすべき又講究すべき——講究しても盡されぬ所の問題を此所に提出しやうと思ふのであります。これは人の一生を支配する所の大變大きな問題であつて、學生が學校生活中に必要なみならず學校を出て後も必要なことである。一體世間の人は學生生活と云ふことに就いて『是れは學生中のことで卒業をすれば學生生活ではない』と云ふ考へを持つが是は弊害のあることであります。人は一生の間自



分の學生時代の生活を忘れずして常に斯くの如き考へを持つやうにしたいと思ふ。斯う云ふ見地からして其の必要なることを申述べやう。又今の日本帝國の地位と時代とによつて必要である點からも、併せて此の問題を申述べやうと思ふ。

### (二) 青年の責任

問題それは何んであるか、と云つたならば今の青年は重大なる責任があると思ふことを申すのでありますが、其の點は種々で私が今考へる所では先づ第一に世界の日本となすこと、第二に日本の世界となすこと、斯様な責任を持つて居るのであると思ひます。第一の世界の日本となすことに就きましては、明治天皇の御治世に於て偉大なる發達をし又諸先輩の誠を以て皇國に盡されま

した結果によつて非常なる好結果を得たのであります。併しながら未だ世界の日本となることに就いて、其の全きを致すことは出来ないのであります。況んや日本の世界に爲すことに於てをや——斯様なことは頗る六ヶ敷いことで、太閤さんの如きは世界の日本となす前に直ちに日本の世界と爲さんとしたのでありました。私は明治維新後の吾々先輩と思ふべき所の人々及び文字の上知り合つた人も澤山ありますが、太閤さんのやうな人は澤山ありません。現在人と人との間に知り合つた人もありませんが未だ以て太閤さんのやうな人はないのであります。然し其の偉大なる効果を爲したと云ふものは世界の日本とせんといふことに就いて未だ全きをなすことを得ずに、皆故人となつて居ります。現在の日本は未だ世界の日本となりをふせたと云ふことは言へないのであります。あらゆる生活の點に於て——個人の生活、社會の生活、國家の生活——或



は學術の點に於ても、今日以後に於て之に盡すべき所のもの非常に大なる餘地をなして居るのであります。それ故に第二の日本の世界に爲すに於ては非常に未だ遠いのであります。斯くの如く申しましたならば、彼れ老いたり日本の世界となす吾れの一擧手一投足のみ何んぞ秀吉のみならんや、と云ふやうなことを御考へになつて居る方が諸君の中にありませうが、それは誠に其の志嘉すべく、誠に結構なことではありますが、私の見地から言へば尙ほ日遠きものであると思ふ。世界の日本になるに於て實に其の端緒は得たゞけのことであつて、或は準備時代であること云つても可なる程であります。否な悲しむべきことには、それは次第に退歩に向つて居るかも知れんと云ふのであります。然るに此の點に就いて精しく述ぶることは或は未だ一の問題でありますから此所いらにして諸君の講究に任かせる方が諸君に敬意を拂ふ所以であると思ふ。

諸君にして之れに就き自問自答の上若し私の述べたる以上の能力を以て居らんければ、その父兄に對して濟みません、國家に對して濟みません、是だけの教育をして居らるゝに對しては努むること甚だ少なしと云はなければならん。故に準備時代であるか退歩時代であるかと云ふことを精しくは述べぬ。何れの道にするも諸君の力にありとする方が穩當であると思ふ。

### (三) 世界の日本たらしめよ

扱又茲に私は改めて世界の日本とせやうと先輩は如何なる教育を受けて來たかど云ふことを諸君の問題に供したいと思ふ。是等の人は第一高等學校に入つたか、第二高等學校に入つたか、或は東京帝國大學京都帝國大學に居つたかを諸君に問ひたいのであります。是等の點に就いて多大なる盡力を致しました人



が如何なる人であるか、又文字ありし人か文字なかりし人か、内地的智識であつたか、世界的智識であつたか、斯様に講究して参りますならばこれだけの教育を受けられて、之れだけの幸福なる経過をして居らるゝ諸君は必ずや彼れ以上のことをしやうと云ふ考へが心に浮かぶであらうと思ふ。又、事實上から云つても諸君は必ずさうあらねばならぬと信するのであります。此の見地からして更に諸君に申述べたいのは、何うして無學無識に拘らず彼等は斯の如き成功をしたかと云ふ問題になるのであります。諸君の中には橋本左内の傳を讀んで居らるゝ人もあらう。彼れは二十五歳、其の當時福井の家老——親父さんか祖父さんのやうな人と往復した手紙を見ても如何に彼が考への熟した注意の周到なる驚くべき程であるかわかります。勿論、諸君は注意周到であられるから、そんなことは當り前であると云はるゝかも知れませんが、それは誠に結構

なことである。何んぞ橋本左内に限らんやでありますか、併し私は只若うして其の老熟なる點から深く感じたので些か此所に申述べればかりなのであります。さてこの人は維新前其の血を注いで當時の因循姑息な人心に消毒を行ふた人であります。實にゲーテが云ふ通り「フルート、イスト、ベルシエンテルト」と云ふべき血液——一種の消毒液である、昇汞石炭酸のやうな消毒の効力のあるものである——其の血液には誠と云ふものがなければ、幾ら之を注ぐと雖汚ららしい計りで何等の効目がないのであります。其の血液は如何なる効果をなすか、事實効果をなすものは如何なるものであるか、と云ふことは暫く諸君の判断に任せるとしても兎に角「フルート、イスト、ベルシエンテルト」と云ふ此の點に就いては疑ひないと思ふ。斯の如く觀察し來つて見ますと、其の内

に何等の學問修養なくして、有る人以上の能力と判断とを以つて國家に貢獻し



來つた人もあつたのであります。して見ると、私は決して學者を輕んじたり學生を輕蔑したりするのではないが造物者の御直參と云ふ中に偉い人があると云ふことを云ひたいのであります。學者が學問を尊敬する、藝術家が藝術を尊敬する、是れ決して不可ならんことで固より當然であります。此の世界の日本とすることに就て貢獻されたる人々に就いて分析的に觀察して來ると種々なるものがあつて、其の中には此の人は何所で學問して判斷力が起つたと云ふことの分つてゐるものもあるけれども、何所でも學問をしたことのない人で何うして斯うなつたか、と云ふ疑問が起つて來ることは、學問をした人程驚くのであります。其の人は學問はして居りませう、本は讀んで居りませう、併し造物者の御直參は別であること云ふことは知らないのであります。此の造物者の御直參と云ふことに就いて諸君も御承知でありませうが、或る將軍家から直參の人が御直

參で其の次が陪臣であります。これから押すと學者と云ふものは多く陪臣であります。是は非常に不都合なことであります。『陪臣國も表裏三世失はざるは稀なり』と云ふことを支那の學者が言ふて居ります。其の點から陪臣と云ふことを云ふては學者に對して甚だ失禮であるが、私はさう云ふ意味ではない。學問をするに就て學問をするだけの尊敬を拂ふと共に、此のものをして眞に價値あり内容のあるものとしなければならぬと云ふことを諸君に問ふのであります。併しながら己れは造物者の御直參だと云ふて勉強をしないと云ふことに聞いて貰つては困るのであります。諸君は誤解のないやうに宜しく注意して聞いて貰ひたい。彼は自分の無學を胡麗化さんが爲に御直參の所以を説いて學問を罵倒すると云ふことは又誤れるの甚しきであります。此所が必要な點である。近來科學の進歩藝術の進歩に就いて文明生活の教育に這入りまして、文明教育を受



けるやうになり、遂に其の人の天性を害して其の間の取捨採擇宜しきを得んために文明の中毒に懸つて了ふが、斯の如きことのないやうに希望するのである。此の點から教育上に於て講究しましたものは、ベタゴニーバタロニスのようなもので、教育病理學と云ふやうなものが起つて段々攻究して居りますが、それは唯窓の付けやうが悪いから起ると云ふやうな學校衛生のことで、サイコロジの心理哲學に關した關係は全く教育自身の病理を講究するの必要が起つて文明病を攻究するやうに至つたのであります。其の點を唯今申述べました所のこと、照應して御考へ下さつたならば私の辯の至らざる所、意の盡さるる所を補ひ得らるゝと思ふ。

#### (四) 至誠を以て進め

而して此の世界の日本とすることに貢獻したる人と諸君とを比べるならば、或る點は彼等は非常に宜く進んで居るが平均した所足らん所があると私は思ふのであります。すると又茲にその足らん所のある人達が何うして斯う云ふ大事業を成功するに至つたか、と云ふ疑問が起る。それで無遠慮に申しますが、諸君は其の人々よりはより以上の學問とか藝術的智識のあるに拘はらず今後貢獻する所或は先輩に劣りはしまいか。然らば如何にしたなら左様なことの無いやうにすることが出来るか。先輩に比すればより以上の科學藝術はあるが如何にしたならばより以上の効果を現はすことを得るか、と云ふ此の問題に於て私は諸君に傳授しやうと思ふ。私の發明を只で諸君に賣らうと思ふ。此の發明を以て居ると非常に偉いやうに思はれるだらうが、諸君より偉いことが一つある。さう云ふと諸君は「正月餅を食つた事だらう」と言ふ。私は「否」と答へる。



『澤山門松を潜つたことだらう』と言ふと、私はそれにも『否』と答へる。諸君は必ず感ふ。感ふから私から言ふ。それは何んであるか？只、諸君より勞々をしてゐると云ふことである。諸君の中に『何に偉らさうなことを云ふ』と斯う云ふ方も居るでありませうが、けれ共、君達は五十年苦勞はしないだらうと思ふ。茲に於て必ず閉口するに違ひない。五十年の苦勞に依つて得たものを只で賣らうと云ふことになつて來たのであります。私が研究して見るに、此の人が……前に申したやうに無學の人が學問のある人よりも偉いことをする……造物者の御直參であると言ふに驚いたが、一方人は大臣にでもなると中々偉らい人であると思ふ。併し未だく、奥底がある。偉くなる原動力となるものがある。それはその人の誠である。近來世間は漸く其の邊のことが分つて來たものと見えて、至誠とか誠意とか云ふことを八ヶ間敷く云ふが、是は此の『天下亂れて

信義が起る』と云ふ譯で、信義即ち誠と云ふことが足りなくなつたから盛んに言ふのかも知れん。信義が高くして詐術が行はれる、世間の人は誠を盡して居るかと思ふに皆などうも誠と云ふ觀念にさへ乏しいのである。故に心ある人は八ヶ間敷く言ふ。至誠……誠と云ふものが餘程此の日本帝國をもつて世界の日本と爲すことに於て成功して居る。又之れを既往に就て見るも貢獻した所の人に人並すぐれて誠と云ふものがあつたと云ふことを私は常に思ふのであります。けれどもあらゆる點に於て必ずしも今人古人に及ばずとは言ひません。又今人の誠、古人に及ばずとも言ひませんが、併し此の世界の日本と爲すことに就いて貢獻した所の人が、其の識能はいざ知らず、誠と云ふことは或は今人に勝つて居たかのやうに思はれます。

抑々此の誠と云ふものは實に尊敬すべきものであるが、段々と科學藝術の進



歩發達するにつれ此念が乏しくなつて來はせぬだらうか、私は此の問題を研究して居るのであります。何うか諸君にも充分研究して貰ひたい。私の發明して諸君に只で與へると云ふのは即ちこれでありませぬ。

其所で此の誠と云ふものは、人の……科學藝術の智識に乏しいにも拘はらず成功する吾々の先輩の如き……偉大なる勢力になると思ふ。成程諸君の知らるる所の、先輩……世界の日本とすることに就いて偉大なる貢獻をなした——所が今日生きてゐると假定し假令ば或る問題を授けて此の問題に就いて問ふたなら、或は諸君の前に落第するかも知れん。何となれば其の人達は此の問題に就いて分析綜合……如何にして説明するやと云ふやうなことは出來ないから……例へば彼の物故した兒玉總督であります。此人は頭の聰明な人でありまして、政治上のことにせよ或は他の何んな問題を持つて行つても、是は斯うやれと云

ふ風に出来る。所が心理學的問題にしても或は吾人の生活問題にしても之に對して分析綜合して説明せよ、と云ふ風にやると落第するかも知れん。又數字的關係を持つて行つた時に、チャンと式を出してやることは出來ないが暗算でサツサとやる。之は私が九年間兒玉總督と一所に居て實際見た所のことでありませぬ。斯の如く分析綜合と云ふことは餘り出來ない計算にしても皆暗算でやつて了ふ。總てが斯う云ふ風なやり方であるから今の學問をやつた人から見ると變かも知れぬが、其實は中々變どころでない、一種の偉い所であり、又、物に成功する所以のものである。と云ふのは誠意と云ふものが其の人にあるからで、此の誠意と云ふものは偉大なる効果あるものであります。で、是れは矢張り諸君の一生を支配して行く所のものではなからうかと思ふ。人の心に誠意と云ふものゝ本體が立つて來ると、今迄困難だと思ふて居たことも困難と思はな



くなると云ふ風に色々の功德のあるものであります。何如なる錠前も誠意の鍵を持つて行くなれば直ちに開かれる、飛行機なくして千里の道を飛行することも出来る。斯様な所の誠を以つて先輩は事をやつたから、日本帝國を世界の日本とすることが出来たのであります。然るに近來文明教育の弊害として分科教育が起り、種々なる部類に教育が分たれるやうになつた。教育と云ふことを深く精しく専門に分つて教へるのは結構なことでありませうけれども専門／＼と云ひつゝ結局一つであること云ふことを忘れて居る。専門／＼と只専門に計り走つて了つて本元を忘れて居る。『貴様はそんなことを言ふが東京ユニバーシティーの教育を受けもしないで分るものか』と云ふかも知れんが大學に這入つた先生が仕事をする場合専門／＼と云ふて木を數へて林を見なかつた人がある。斯う云ふことを申すと『あれは例のホラだ』と言ふかも知れん。ホラではない。實際

私は大學を卒業した人を澤山使つて居る。私に使はれて居る人が悉く悪いとは言はんが、其人々の實際に就て働らく有様から考へて見ると、誠と云ふ偉大なる力が缺けて居る上に総合的の力が缺けて居るために、自分の技術なり學問なりを完全に應用することが出来ない。分科教育と云ふものは學問を人に教へる便利、研究の便利、此の點から言ふて見ると今日の分科教育と云ふものは必要である。けれども之を習ふて應用する場合には分析綜合と云ふことが自由に出来なければならぬ。之を直して行くには誠意の努力に待たなければならぬと言ふことになる。昔の人は誠の念が存して居るから學問が餘りなくとも宜く出来る。所で、そんなら分科教育の盛んな中にあつては努力がないかと云ふとさうではない。斯う云ふ所が私の發明で諸君に申上げるのでありまして、決して私が諸君にホラを言ふのではありません。此のことは實に諸君の一生を利益



するものであるが、實行すると否とは諸君の遺方如何にある。一生の中一時間か二時間を防げたと云ふことは諸君の生命の一部を奪ふたのであります。私の言ふことが無用なるものであつて、諸君に利益する所がなかつたら、時の上に於て、殺人罪を犯したものである。だから此の上長くは話さん。長く話すならば諸君は少なくとも私の問題に苦痛を感ずるのであります。

諸君、私の言葉の足らざる所、意の至らざる所を補ふて、而して分科教育なるものは學問その物を教へる所の便利、講究する所の便利であつて是のみでは社會に立つて満足が出来ない。然らばそれを補ふものは何か、其方法は色々あるが、就中最も強き古今に互り内外に互つて而して變らざるものは即ち誠である。と云ふことを諸君は深く記憶せられんことを希望するのであります。此の誠ある時は卒業して實業方面の事務をするにしても、國家の所理に任ずるにし

ても上手に行く、唯々誠の一事、それによつて熱心に從事すると言ふことに相成りますれば、初めて其の科學、藝術の効果を全ふして、人生の幸福を拓殖して行くことになる。以上申したことは、私が發明したものは諸君に只であげると云ふことは戯談の話であつて、私の實驗したる所のもの、諸先輩より示された所のものを其のまゝ、物語るに過ぎないのであります。

扱此の世界の日本にしました所の人々は種々なる人があります。中で私が書籍上に於て或は其他の事情に依りて親しんだ人の中、最初に趣味を持ったのは、岩倉右大臣である。此の人が東西文明の融合に貢献したる所は偉大であります。當時の國狀に鑑み多くの反對者が有るにも拘はらず至誠を以て、毀譽褒貶に耳をかさず、國家に貢献せんと云ふことを考へられ、又如何なる人にも邊服を飾らず、政治に對して十分に盡されたと云ふことの、其の至誠の溢れて居ることを



見るのであります。次に近くは伊藤公爵であります。伊藤公と云ふ人は何んな書生小供でも七面鳥の様になつて、自分にいけないと思つたことは、それはいかんと言ふて熱心に議論する。是は日本人の弊であります。少し名のある人となると君子然として餘り議論などをしない方が偉いと考へて居る。其所へ行くと伊藤公は議論が違へば青い顔、赤い顔をしてやるのであります。その一例として斯う云ふ話があります。それは外務省の一人で一日伊藤公の前に出で『陸奥さんが話をしたが、伊藤さんの偉いことは皆んな知つて居るが通辯を以つて話しなされば宜いのに、李鴻章との談判の時に無用な英語で話すからいかんと言ひました』と言ふたのであります。『さうか』と言つて笑つてよかりさうなものだが、伊藤公は『馬鹿を言へ……其んな馬鹿を言ふからいかん、貴様そんなことを聞いて居て何んとも言はず、陸奥を恐れて居るからいかん。外交はそ

んなものではない、』と斯う言はれた。尤も此の時は盛んに飲んで居たのもあります。が總てさう云ふ調子である。併し伊藤公の言ふには『其の時李鴻章が英語を話すものを連れて来たから不十分であつたが英語で話をした。それは支那人たる李鴻章が翻譯して居れば、話に少しも疑ひを容れんのである。我れの誠を彼れに知らしむるには通辯をしては駄目だ』と言はれた。これ甚だ面白いことだ、その誠意のある所は私の非常に感服するのであります。我れの誠を彼れの胸中に置くと云ふのは誠にその宜しきを得て居ると思ひます。モウ一つは斯う云ふ話があります。極くつまらん様なことであります。伊藤公は仲々競争心が強くして仲々字を書かん人でありますが、或る時彼れに一つ字を書かせやうと云ふので此方では墨をすつて居る。所が『伊藤さん字を書いて下さい』と言つて頼んでも書かん。其所で誰れか『墨を折角磨つたのだからそれじや、



君書いて呉れ給へ」と言つて側の者に頼む、「宜しい」と言つて書く振りをする。さうすると伊藤公は負けん氣ですから「人が書くなら己れも書く」と言ふて恰も自分の字は一番上手だと思つて書く。實に小供の様な所があるが、此の間に無量なる誠意が溢れて居る。それ伊藤公の心の中には誠と言ふものが深く強く有して居るからであります。

諸君は今日以後に於て多大なる希望を持って國家に貢献せらるゝでありません。我々も亦諸君の國家に貢献せらるゝことの多大なることを切に希望いたします。併し近來の文明病に侵されて、半人前の働きで一人前の報酬を得ることを希望すると云ふことをせず誠を以て仕事に忠實なる時は天は其人を捨てないのであります。實力のないのみならず仕事も碌にせんで報酬は一人以上の禮を取る。二人三人十人前もの禮を取らうとするのである。此の考では今日の上

下を侵して居る。日本帝國の文明的進歩の力の世界的競争の上に立つ時に大なる障害となるものは誠がないと云ふことであるではなからうかと思ふのであります。誠意熱心と言ふことは萬事の上に必要である。誠あれば何事も成功するに至ると思ふのであります。諸君は更らに私以上の發明をせられて、以つて大いに今後國家のために社會のために發展せられんことを希望するのであります。諸君の大成せられんことを祈るのであります。



## 真正文明の生活

### (一) 精神的發達の現はれ

真正文明の生活、この文明と云ふ語は、學者の説く所によれば、非常に難解の意義を持つて。大體に諸説を綜合して、簡單なる定義を與へて見ると、『人間がその目的のために創造したる價値の總計である』と云ふ事が出来る。この文明の實は人間が永い永い歴史の間に創造し、稼ぎ出したものであるが、實は往々之れを物質的文明と精神的文明との二つに區別するが、兩者は違つたものでなくて所謂物質的文明も亦純然たる精神的發達の現はれたものである。

そこで太古以來文明が漸次發達して來た後を辿つてよく考へて見ると、總て

文明と云ふものゝ進歩は、人間の精神、思想が周圍の現實に適合して行くものであることが了解されるのである。即ち不適切な思想や虚偽の思想は排斥せられ、確實なる真正な思想のみが發達しては、周圍の現實社會に適合するやうになるのが、真正文明の生活と云ふのである。これを今少し平易に云つて見れば、道理に叶つて科學的根據を持つた學理が日常萬般の事物に應用せられ、在來の間違つた俗衆の思想を改めて、所謂學俗一致の境遇に達するのが真正文明の生活である。

### (二) 現代の通弊

熟々日本今日の有様を見るに、學者は俗人に交るのを避けつゝ、獨り書齋の裡に籠つて自分の専門とする所の研究に耽つて居る。また實業家は學者の研究



を迂遠であるとして、算盤を相手に眼前の利益にこれ汲々としてゐる。かくの如く學問と實際社會とが背馳して居ては、到底眞正文明の生活は望まれないのである。甚しきに至つては學者の間に於ても各専門の研究に没頭して他を顧みない云ふ状態で、法律家は工業などの智識が皆無、文學者に科學の智識のあるものは稀である。これでは裁判所に立つて完全なる辯論をすることゝ出來なければ、小説を書いても科學的に人を首肯せしむるやうな立派なものが出来ない。是れこそ確に我國現代の通弊であると思ふ。

吾輩は聊かなりとも、この通弊を救済しやうとして、微力ながら數年前より學俗懇話會なるものを組織しまして、大學其他の少壯教授連と、新進有爲の實業家とを會して相互に研究の結果を報告し合つて實業界の情況を聞くことにいたして居つたのである。今日市町村等自治生活の状態を見るに、果して健全なる

發達をしてゐるかどうか疑問である。これも彼の學俗背馳と云ふ現象にその根源があつて、間違つて虚偽の文明生活を理想として居るから起るのである。殊に東京大阪の如き大都市は、實に個人を超越した文化の演舞場であつて客観的に言へば、文化肥大症に罹つて居り、個人的に云へば文化萎縮症に陥つて居るので所謂文明病とはこのことである。

(三) 國家に對する精神稅

『唄は拙いが聞人は上手』と云ふやうな譯に、諸君ならば、我輩の拙い講話でも十分了解さるゝであらうと思つたからである。吾輩の云はんとする所は即ち所謂學俗の一致融合と云ふ事である。如何なる日常生活にも學問を應用せなければ駄目である。諸君が衆議員を選擧さるゝは國家より參政權を賦與せられ



てこれを行使するのであつて、これも學俗一致の生活が必要である。即ち諸君は候補者の政見學識人格等を十分に考量して選舉をなさらないと、後日必ず後悔しなければならぬことが起る。主義政見の區別も辨へないで、政黨政治家の煽動演説などに動かされて投票を行ふのは學俗一致の生活ではない。今日の我國には中央政界に於ける政權爭奪の弊害が、知らず識らずの裡に地方に及んで居るので、我輩は極力此の弊害を除く様に努力して居るのである。これが我輩の國家社會に對する義務であつて、精神税としてこれを支拂ふのである。學者にても實業家にても社會の水平線以上に出で、一般の尊敬を受けて居る人は何れもこの精神税を支拂ふべき義務があるのである。若し此の義務を怠る様な人間ならば社會の風上に置けないものだと思ふのである。

#### (四) 學術の進歩

諸君、今日は世界歴史に於て容易ならざる時機である。ポニヌヤに起つた奥國皇太子、暗殺事件が動機となつて、歐洲大戦亂となり、延いて世界到處戰亂の渦中に投じ、その結果は今より到底豫測することが出来ないのである。然しながら熟々此戰亂の経過を見るのに、平素眞正文明の生活をして居る國、即ち學俗の一致融合して居る國が、戰爭に於ても強い國であると云ふことが了解されるのである。殊に敵國ながらも獨逸の國は此の點に於いて大に見るべき點がある、無論終局の勝敗は別として、開戦以來四方に世界の強國を引き受けて奮戦力闘して居るのである。これは獨逸に於て學俗の一致融合が完全に行はれて居るからで、商工業の急劇な發展も、兵術軍器の進歩も、政治經濟の改善も



更らに一步進んで、是等の基礎たる教育の發達も、獨逸の國內に於ては一として學術的研究の應用即ち眞正文明生活の效果でないものはないのである。獨逸人は天性が研究的精神に富んで居て、老若男女の別なく、社會百般の事物に接すれば、必ずその正確なる智識を求め、何故に然かるかと云ふ原因を穿鑿しなければ満足が出来ないのである。獨逸人は生れながらにして、學者であると云ふことは歐米一般の評する所である。従つて世界各國より獨逸大學に留學生を送り、また獨逸學者の研究は世界一般にその發表さるゝのを鶴首して待つて居るのである。これらは孰れも偶然に發生したものでなくて實に多數の學者の苦心慘憺たる研究の賜である。學術の研究は一人や二人または一代や二代で其の効を完うすることは出来ないで、廣大なる分業組織によつて、周到に整備したる機關に依頼し、最も智能の卓越したものがこれに従事せねばならないの

である。即ち各々専門に分れて居ても其間に有機的の連絡が出来て、渾然たる一體をなして居らなければならないので、我が國の如き各専門家孤立して、他の學問は我れ關せずと云ふ様な態度では駄目である。それから學術の研究は人間の事業の中で、最も眞面目で最も確實で、最も精密で、且つ最も堅忍不拔の精神氣魄を要するものであつて、而もその研究の結果は直ちに目前に表はれて來るものでない、全く獻身的犠牲の事業である。

従つて富豪や特殊の人々が特にこれを優待し、保護し、或は名譽の地位を與へてやるのでなければ一國內に於ける學術研究の事業は到底舉らないのである。

然るに我邦の状態はどうかと云ふに、近頃朝野共に極めて不眞面目になつて來て、政治家は詭辯を弄して一時を糊塗し、愚昧なる民衆を煽動して國家百年



の大計をなすなど云ふものがなく、實業界に於ても所謂成金と云ふものが現はれて、國民の僥倖心を挑發し、勿論學者とか學術の研究とか云ふ遠大の計畫をなすものがないのである。即ち今日の所、政治家と云はず、實業家と云はず學者と云はず、何れを見ても、悉く不眞面目であつて、各自が己れの利益と打算とのみに汲々として居る次第で、どうか諸君の御一考を煩はしたのである。

### (五) 獨逸人學術の研究

不肖の臺灣民政長官時代に造つた學術研究所や、滿鐵總裁時代の調査所の如きも、其の依つて來るところは、多少この弊害を補はうとしたので、種々の成績を得たのであつたが、今では殆どこれらを顧みるものがないやうになつてしまつたのである。これに反して、獨逸に於ては學術の研究が國家の盛衰と直接

の關係を持つて居ることがよく了解せられて、所謂學俗一致の境域に到つて居るから、種々の學術研究は大學其他學校に限らないで、如何なる方面の事業に於ても目前焦眉の急務ばかりでなく、必ず遠大の目的を立て、研究事業を行つてゐるのである、これがために各工業會社に於ては既に研究の濟んだものを製造する傍、高給の技師を置いて研究部を組織し、發明はしてもしないでも俸給を高くし待遇をよくして置く、其多數は何一つ發明をしないうで了つても、誰か一人でも偉大なことを發明すれば會社に取り、國家にとつて非常なる利益である。獨逸が學術の研究のために學者を優遇し、且つ費用を惜まないのは、實にかゝる打算より出で、居ると云つて差支へがないのである。

### (六) 理想的の境地



斯様に獨逸人は學者を保護し、優遇して獨逸の學術は世界の學術で、獨逸の文明は人類の文明も同様の意義であると信じ、今回の大戦亂に於ても、聯合軍は獨逸の學術文明即ち世界の學術文明の敵である所以を論じて米國人並に獨逸學術崇拜者の同情を得んと努めつゝあるのでありまして、決してこれを誇大狂の夢として輕々に看過すべきものではないのである。獨逸の學者が堂々と斯る意見を敢て世界に發表し得るのは幾分にも同情者のあることを豫期したものであつて、獨逸學術の世界に於ける勢力のあることを獨逸人が自ら信じて居るからである。斯様に獨逸學者の研究は一方から見れば世界文明の進歩に貢獻して居るけれども、直接に利益を蒙るものは勿論獨逸國民自身である。即ち獨逸の學術研究が商工業の發展に多大の貢獻をして、甚だしきに至つては各工業上の廢物の利用に關する研究が最も精密に行はれ一物として棄つべきものゝ

ないやうにして、工業經濟の極致に達して居るのである。また國法學者歴史家等の人文科學者が獨逸の世界政策を學術上より援護し、または獨逸國民の自信と抱負とに裏書をした事も特に注意を要するのであつて、獨逸の大學にはカイゼルの御用學者が少くないのである。實際に於てカイゼルの意を受けて或る精神を學生に吹き込んで居るものも少くないさうである。而も是等は一も不に竹を接いだやうな俄細工でなく、容易に打破る可らざる學術的根據より立論し、世界一般に傾聴せらるゝ様な學說として堂々世間に發表するのである。兎に角獨逸の學者の研究は決して空理空論に止まること無く、現實社會に適應して、あらゆる方面から國家の發展に貢獻して居るのである——これが眞正文明の生活と云ふべきであらうと信ずる。

今後日本の社會が此くの如き理想的の境地に達しまするには、總ての學者政



治家實業家が發奮して、從來の偏見を去り、所謂精神税として自己の有する長所を以て社會に貢獻し學俗一致の境地を作り出さなければならぬ。吾輩の如き微力ながらこの方面に力のあらん限りを盡くし、一日も早く日本國民が真正文明の生活に入らんことを切望してゐるのである。

### 風雲兒の眞意義

#### (一) 風雲兒とは何ぞや

世に所謂風雲兒とは何ぞや、天下の變に際會して翻雲覆雨の離れ業を演じ撥亂反正の快圖を遂ぐと云ふの意味に於て、普通には亂世の英雄、治世の僥倖者若くは一種の氣まぐれ者の如く解釋さるゝ場合が多い。従つて世人の之を見るや、恰も傳記小説に對するが如く好んで其生涯の波瀾曲折、運命の數奇踏躑を語り、雲に乗じて上天するものゝ如く、如何なる偉人傑士をも戯曲化せずんば止まない。これ抑も所謂風雲兒なるものゝ眞意義を適當に理解せりといひ得べきや予は先づ此點に於て多少の疑問なきを得ない。



若し時代の趨勢を観察して百世に名を成せるものを以て風雲兒といひ得べくんば、古今の英雄豪傑、聖人君子、總て之れ風雲兒ならざるなし、何となれば如何の俊豪哲人と雖も時代を離れて存立し活躍し能はざるが故である。其或者は時代を創造し又は時代に反抗し或は時代を超越すると云ふも、歴史を無視し民族思想を抛ち一切の環境を曠して事業を成就し得たるものは無い。釋迦は四性の差別を打破し人天の師、四海轉輪の妙法を弘通することを理想としたが、併し優婆泥沙士の哲學なく摩渴陀の文化なくんば彼れの大思想は産れない。此意味に於て釋迦は古代印度の一風雲兒であると云ふことを拒み能はぬ。トルストイは自ら世界の一平民、國家の無籍者たるを標榜して居つたが併し彼れの頭腦より露國の民族精神を除去し、彼れの血液より露國の歴史、傳統等を搾り取らば果して何物を剩すであらう。ニイチエは時勢の反逆者として最も放膽的に

現代を呪詛したが、而も彼れは徹頭徹尾十九世紀後半の歴史的人物であつて、それ以前、若くはそれ以後にニイチエあるを容さない。即ち東西幾千載の間に現はれたる偉人傑士は悉く時代の産物たりと云ひ得ると同時に、又、所謂風雲兒たらざるものは無いのである。

## (二) 時代の産物

されど『時代の産物』なるが故に彼等は總て歴史に引摺られ環境に支配されたる時代の追隨者なりといふのでは無い。否、時代の追隨者は滔々たる凡庸の徒である。苟も英雄豪傑を以て目せらるゝ以上必ずや時代を創造し、又改造し歴史を超越し又は革新し、環境を征服し、又は同化せしむる底の偉大なる天稟の個性を有つてゐるに相違ない。故に彼等の偉大なる天才、個性の力を蔑視して



風雲の變を談ずるは固より輕躁迂濶の譏を免れない。然るに世人の風雲兒を見  
る、殆ど個性の權威を忘却し天才の性格、苦心、造詣等に深き注意を拂はずし  
て恰も投機師を以て擬するが如くなるは何ぞや、これ蓋し風雲兒の眞意義を未  
だ明瞭に理解せざるが爲ではなからうか。

(三) 風雲兒の二種の別

予の見る所に依れば所謂風雲兒なる者に二種の別がある、其一は一時的風雲  
兒にして其二は則ち永久的風雲兒である。前者は人生の缺陷、人類の弱點に乗  
じて當面の事功に没頭するものである。之れに反して後者は人生の缺陷、人類  
の弱點を補充することを目的とする、此故に必らずしも志を現代に伸べ能はず  
とするも、後世に至りて漸次其理想を實現し時を経て益々光輝を發揚し來るの

善根を植へて置く。耶蘇は十二金を以てイスカリオテのユダに賣られたが、後に  
は人心に復活して世界の救世主と仰がれた。法然は南都北嶺の僧徒より痛切な  
る迫害を受け其墳墓を毀れたること數度に及んだが、間もなく六十餘州念佛の  
聲を聞かざる地なきに至つた。一時的風雲兒と永久的風雲兒との差、人生人類  
の弱點に乗ずるものと、弱點を補ふものとの根本的區別、この二者を明確に認識  
して古今の英雄豪傑を観察するの用意を缺くなくんば、大體に於て風雲兒の意  
義及價値を適當に卷取し得ると思ふ。

政治は人心の弱點に投ずるを以て秘訣と爲すとは能く人の口にする所であ  
る。こは前述の一時的風雲兒としての成功を贏ち得る六蹈三略なるかも知らね  
ど、斷じて永久的風雲兒たんとする者の欲する所ではない。幸にして西人の所  
謂ポリチミアンとなり得るとも、到底ステーツマンとして許さるゝことは出來



ない。惟ふに今時の政黨も亦風雲兒の性質を帯び、其勢力の消長盛衰は人心の弱點に乗ずるの巧拙に依つて定まり、未だ眞に人の人類の缺陷を補ふといふ永久的理想を發現するに至らぬ。此種の風雲兒及び政黨は譬へば雷獸の如きものにして、一たび颯風の襲ふや電撃驟雨黒雲恂湧咫尺霧勃の活況を呈すれど、廻颯熄み雲影散すれば巖石を挫くの驍勇あるやに見えたる雷獸も忽ち蟄伏して南京鼠と擇ばない。又譬へば風伯雨師の勢を驅つて滔天の猛威を示す飛龍の躍動が天地平靜の日に在ては空しく蛟龍池中に蠢々たらざるを得ざるが如し、一時の奇偉に乗ずるを知りて久遠の理想と生命とを有せざるものは決して眞の風雲とは言へない。假りに所謂風雲兒性質を解して投機的人物、投機的政黨の類を示すものとせば、予は寧ろ此の如き人間の輩出を歓迎する譯には行かぬ。それは單に神史講談趣味の低級人士に弄ばるゝ偶像に過ぎないからである。

(四) 現代の文明

現代の文明は或る意味に於て宗教と政黨との對立時代であるといふが、其起源に於て、其成立及發達の歴史的徑路に於て兩者著しく共通の類似點を有するは數ふべからざる事實である。而して宗教の基礎觀念とも云ふべき正邪の判斷は多くの政黨が利害問題を主張とするに比し、全く其の性質を異にすと認められて居るに拘はらず、實は宗教も亦政黨的思想を脱せざるものである。或は基督教に問ふものあり、善業を積み善事に勵んで天國に生れんことを欲するに若し洗禮を受くるにあらずんば如何と。基督教へて謂らく、「可憐の兒よ、爾の願叶はず」と、即ち博愛を教ふる基督と雖も信仰の内容よりも形式に重きを置き洗禮の有無を以て未來の應果を斷じたのである。蓋し異教徒の信仰及道徳は



如何に眞善美を極むとも不可なりとするのである。これ今日の政黨が黨派黨籍の差に依て總ての評價を逆にするに敢て異なる所はない。獨逸の神は英佛の神を罵りて邪なりとし、英佛の神は獨逸の神を誹りて罪惡甚重のサタンなりといふ。同一基督教の神にして猶此の如し、宗教も亦人生の缺陷、人類の弱點に乗じて其繁榮を期するもの歟。三世に徹する福音は此種偏狹なる排他政黨派心の間に在つて之を聴くこと不可能である。

法華は念佛の信者を貶して外道視し、眞宗教徒は日蓮主義を目して異端者流と嘲り、各宗各派孰れも我佛尊の執念に囚はるゝこと深きは人の熟知する所である。

如何なる善人君子と雖も自宗を奉せざる者は地獄に落ち、如何なる惡人と雖も自派に列するものは莊嚴淨土に生くると爲す、こは言ふまでもなし人心の弱

點を利用して自宗自派の教理を私しするの結果である。釋迦は階級制度の打破に努め八萬四千の法明悉く機に應じて微妙の眞諦に通ずとし、百川流れて終に洋々たる大海に潮すと言つたが、それでも佛教々團の成立に伴ひ外は婆羅門を排し内は大衆上座の軋轢を醸すに至つた。彼は異教を譏諷することを以て五逆の重罪と同一視したる程なるも後世各派の交々起るや互に廢立教判を嚴にし大小權實の論紛紛として底止する所を知らず。これ基督が洗禮の有無を以て正邪の標準と爲したるご其軌を一にするものである。孔教は然らず、彼が説く所は此點に於て宗教信仰ご其類を異にすること最も明白、未だ學ばざる所は他の知識を待つて完きを期し自他同學、彼我同化、互に勵み互に補いて人生修養の功を濟すを理想とした。古來聖賢は百世に通じて渝らず、之れを千載の前に見、更に之を千載の後に稽へて永久の生命を持續するとは云ひ條、其教を垂るゝや



猶上述の如く人生人類の弱點に乗せるの投機的傾向を脱しない。

唯夫れ聖賢は人生人類の弱點に乗ずると同時に、人生人類を補ふの精神を以てし前者を取りて後者に導くべき方便とし、權略としたるに過ぎざるに反し、一時的成功を夢想せる所謂風雲兒にはそれが無い。故に前者は永久的の價値を遺せども後者は陽炎の明滅するが如く消へて其跡を留めず。人心の弱點に投ずることを以て秘訣とする政治家と雷獸の如き政黨との英雄人傑に比して同日に語るべからざるは是が爲めである。

(五) 眞乎の風雲兒

然らば如何なるものが是れ眞乎の風雲兒たる。人生に寄與し人類に貢獻して其缺陷弱點を補ひ永久の生命を世界文明の上に光耀せしむるといふことは、抑

も何に依つて之を完くし得べきや。これ改めて論ずる迄もなし至誠不動の人格に外ならぬ。至誠不動の人格を通して達觀せられたる時代精神の體得、萬古不易の理想を發揮し之を措きて眞の風雲兒は存在しない。

既に至誠不動の人格である。随つて其人格の高卑淺深に依て齊しく風雲兒を以て目せらるもの、中にも格段の差異があるといふことを忘れてはならぬ。例へば上は釋迦、基督、孔子の如き聖賢より弘法、傳教、法然、親鸞、日蓮の如き各宗の高祖、更に下つては天理教の婆さんに至る迄、實に無數の段階がある。こは嘗に宗教家のみならず、政治家、軍人、學者、實業家に就て見るも大小輕重の差あること勿論である。希臘羅馬の古英雄、支那日本の哲人、豪傑、擧げ來れば單に其名を列ねるのみにしても殆ど無數の感があるが、さて退いて是等無數の風雲兒を人類進化の淨玻璃に照破せんか、其中の最大多數はモーメント



の風雲兒、其極めて少數なる偉人に徴して吾等は不滅不朽の眞風雲兒を欽仰することが出来るのである。而して其價值判斷の基礎となるものは即ち至誠不動の人格、之を通じて得たる時代精神の理解と萬古不易の理想の體達如何に因るのである。

近時、世の好事者はナポレオン對カイゼルの比較論に興味を寄せ、頻りに兩者の野心戰略などを喋々するものがある。共に世界の大波瀾を捲き起し、共に雲霞の如き大軍を指揮號令し、共に大膽なる對外的經路を恣まにせる點に於て、洵に兩々相照應映發するの風雲兒と云ひ得るであらう。併しながら問題の研究に此の如き稗史的興味をそつただけでは深き價值ありとは覺えぬ。例へば彼のナポレオン法典が近世國家の權威として尊重さるゝ程の光輝を放ち歴史及民族を異にせる各國に於てすら大に該法典に負ふ所多きを顧みれば、何人も彼

が一時的なるモーメントの風雲兒にあらざりしを認めねばなるまい。一層溯つて云へば中世赫赫の勢威を四方に宜揚せる羅馬帝國は既に壞滅して今只史家の追懷に資するのみなれども、羅馬法典の光りは永久不磨の輝きを有し洋の東西を問はず苟も法律の學を修めんと欲するものは之を無視し去ることが出来ない。シーザーはブルタスに殺され、ナポレオンはウオートルローの一戦に敗れ曠古の覇業朝露の如く消えたりとはいへ、羅馬法典、ナポレオン法典の名に依て後世に與へたる影響は驚嘆すべき偉大な力を有つて居る、之を稱して宗教以上の感化なりといふも必らずしも誇張の言ではない。更に之を正成と尊氏、或は道真と時平とに就て見よ、共に史上の風雲兒として後世に録せらるゝも、一は湊川神社に祭られ又た一は北野天滿宮に奉祀されて其純忠殉國の精神變々として千古に輝き其感化流動の崇高森嚴なる時平尊氏の單に一時的勢威を揮へる



とは天地月露の差がある。これ外面に現はれたる成敗の如何に拘はらず、人心の胸奥に宿れる靈覺の潑瀾として三世に貫通し躍動する所以である。而して大和民族特有の國民精神が冥々の間にも強く人心を支配しつゝあるの理を如實に表彰し具現せるものである。モーメントの風雲兒と無限の流動性を有する永久的風雲兒との異なる所は此一例に依て考ふても炳焉として疑ふの餘地は無い。然るに唯だ一時の勢を見るに急なるの輩は所謂勝てば官軍、負ければ賊、尊氏も可なり時平も不可なしといふが如きの判斷に陥り或は強て奇説を立て、自ら快とするの陋を取てするに至る。これ我民族精神のユニツクなる一大事實を藐視せるに由るのみならず、西人の辟見に囚はれ若くは歴史の一斷片に心目を糜爛せるの禍といはねばならぬ。若し説者の云ふが如く偏へに成敗の跡のみを捉へて尊氏時平を讚美すべくんば終には懸てヤンキーも可なり、ジョンブル

も可なり、唯風雲に乗じて勝者たるを得ば以て誇るに足ると爲すに至らざるを得ない。政權を保持せんが爲めには如何に選舉干渉を試み如何の批政を行ふとも憂へとあさず、政黨内閣なりといつゝ、其實は内閣政黨を作るに止り、又或は立憲非立憲の論を骨張して却て國家觀念を揆無し、且つ立憲の名に於て盛んに非立憲行動を爲すの類皆是れ一時の成敗に眩惑し、モーメントの風雲に投ずるを最上の成功とし洋人の思想に溺れて民族精神を蹂躪し毀損するを憚らざるものなりと言ふも恐らくは辯護の辭があるまい。

されば風雲兒を律するの尺度は單に外形的の事變、攻城野戰の術策、政治外交の表面を見て種々に推斷してはならない。殊に現代の如く民族的國家思想を主として經濟國民の業に碎身するにあらずんば忽ち國際場裡の落伍者ならざるを得ざる時代に在つては、最も切實に永久的生命を有するや否やに心を用ひて



人物を評價しなければならぬ。

### (六) 文明の悪魔

今日の獨逸皇帝を品臚し彼が政策を語るもの、多くは彼を目して軍國主義の悪魔の如く極論し且之を以てビスマルク、トライチケ、ニイチエ等の鼓吹せる所なりとし痛烈なる争鋒を彼等に差向けてゐる。而も此の如き淺薄なる見解はカイゼル其人の勢力、眞價、思想、政策の實相に通せざる短視の非難を免れざるのみならず、所謂軍國主義の精神をすら眞實に理解せざるものである。歴史は古し、獨逸の現皇室がブランデンブルク侯國より起りて北方に雄飛し、フリードリッヒ大王のアンチマキヤヴエリズムなる著者に依て其國礎を固め、尋でウイルヘルム一世に至つては耳曼聯邦の盟立となり遂に獨逸皇帝の榮位に上れる、此

間普國發展の史實は昭々として系統的に一貫せる精神を以て現はれて居るのである。ビスマルクの力は絶倫なりと雖も民族理想を離れて彼の事業を見る能はず、トライチチは非凡の政治家なりと雖も彼は獨逸の國民精神を色讀し透觀して萬丈の光焰を吐いたのである。(敢て獨逸國民精神全體といはず) 誰か獨逸の歴史、獨逸の哲學、獨逸の宗教、獨逸の藝術を塗沫してニイチエの出現を想像し得る。況やヘルンハーデーの如きをや。之を豫言せばカイゼルは獨逸國民、獨逸文明、獨逸の歴史精神を表現せる人格者に外ならぬ、彼れの勢力は獨逸民族の勢力である。彼の政策、彼の雄圖は獨逸文明の化現である。喬木は風に撃たる、獨逸の勢力、文明、民族精神が餘りに強く餘りに明瞭なるを以て直に彼を評して悪魔視するは寧ろ説者の迂濶を自白するに異ならない。僅かにビスマルク、トライチケ等あるを知りて獨逸の國策を論じカイゼルの野心を云々するの



徒は未だ獨逸の歴史を讀まざるものである。時代の趨勢と民族精神を理解せざるものである。健剛なる國民は文王なくとも猶興る、一三者の提擲を待たずとも必ず爲すあるの人物を所出する。

且夫れ世の軍國主義を難するもの専ら獨逸を標的として他を忘るゝの愚に陷れるは何故ぞ。試に思へ、英國は果してアンチミリタリズムの國家なりや、其實際的施設を一瞥する時は多年役々として軍備擴張に銳意せる事實を看取し得るにあらずや。英國民の海軍に熱心なる曾て殆ど政府の軍事豫算を縮減したるを聞かず、多年平和政策を唱導し來れる自由黨内閣すら益々積極的方針を執つて居たのではないか。或は獨逸の野心に刺戟されて餘儀なく防衛手段を講じたるに過ぎずと言はんも、近くヴィクトリヤ女皇以來英國政府の殖民地及び諸外國に對して執り來れる政策は獨逸のそれと比較して實質上に何様の差異あり

や。唯一は其歴史及政策の明々白々たるに對し他は頗る巧妙に世人の視聽を緩にしつゝありしのみ。明白に軍國主義を行ふものは絶對悪にして、隱微に軍國主義を行ふものは絶對善なりとは何人と雖も斷定し能はぬが如く、獨逸の野心獨逸のミリタリズムのみを攻撃するに偏し他の事實を等閑に附するは正當の批評とは云へぬ。此兩者の風雲を會得するに吾人に頗る緊要ではないか。

(七) 風雲は故なく突發せず

風雲は故なくして突發せず、歐洲戦争は單に獨逸のみの罪にあらずして、其諸因近因は極めて複雑である。而して其複雑なるが中に低氣壓の發源地が獨逸と英との兩中心點たりしは最早多言を要せぬ、或は一方を低氣壓とし他を高氣壓の中心と見るも可。兎に角カイゼルを以て平和攪亂の全責負者と爲し英獨兩國



民間に於ける經濟生活の競争を度外視するもの、一個の風雲兒ウイールヘルム二世の人物をすら適當に了解し能はざる輩である。

要するに眞の風雲兒は一時的投機者流であつてはならない。亂世の魁、變時の僥倖兒であつてはならない。假令現世に於て其眞價を認められずとも未來に不朽の光輝を發するものであらねばならぬ。それは即ち人生人類の弱點を補ひ缺陷を匡救する理想に忠實なる至誠不動の人傑であらねばならぬ。而して彼は時代精神を達觀し民族及び歴史魂を體得し、萬古不易の事業に勵む者であらねばならぬ。それは彼が至誠の力千載を照すの理解、熱烈なる犠牲心に依て實現せらるゝ周公フリードリッヒ大王の如きは其典型として見るべき偉人である。否、吾等はこのを遠きに求むるを要せず、近く明治大帝に依て其活きたる具體的典型を崇拜し敬仰し得るのである。明治大帝を光明として日夜に憧憬し之を子々

孫々に傳へ得る日本國民は洵に無上の光榮無比の至幸である。



## 自治體を鞏固にせよ

## (一) 強國の人民は愛郷心も強し

地方農村をして健全なる發達をなさしむるには、恒産あり恒心あるものに由つて自治體を立つることが最も肝要である。殊に自治體の發達に必要なものは愛郷心で、地方民がよく其の郷里を愛するの心は延いて之を國家社會の上に及ぼすもので、眞によく國家社會を愛するもの、着實に眞面目に郷里を愛するもの、固から現はれて来る。

であるから、國家憲政の健全な發達をなし遂ぐるには、健全な自治生活と云ふことを基礎としなければならぬ。此度の歐洲大戦争に當り、自治機關の健全

な發達をしてゐると否とに由つて、列國の國力の間に強いと弱いとの相違が現はれて居ることを證據立て、居る。

我國從來の自治體の様子は何うであつたかと云ふと、中央に於ける政黨間の戦ひは、やゝもすれば直ちに地方農村に及ぼし、之がために地方の自治行政はいはゆる政客のために掻き廻はされ、之と同時に地方民もまた憲政と地方自治との間には、自ら差別があると云ふことを辨へないで漫りに政治論をたゝかしたり、或は政黨に出入して、その政治熱に冒されるの果は、滔々相率いて知らず識らずの間に政争の渦中に投じて、郷黨の利害は舍いてさらに之を顧みない云ふ状況である。

## (二) 國家と農村との關係



予は固より政黨の存立や、其の活動を無視したり、或は破壊せんとするものでないと共に地方民の政黨關係を絶対に排斥するものではないが、彼の政黨と言ひ、政黨と云ふものは固と天下國家の公論公黨である。然るに地方の自治生活は實に郷黨の集團で、恰も一家のやうなものである。であるから、一家の親子兄弟の争ひあるを許さざるが如く、郷黨相互の間に政黨の争ひのあるのは自治の本旨に悖る次第である。尙これを物に譬ふると自治體と憲政との關係は一株の木に於ける根や葉や幹などの關係の如きものである。即ち自治體では各人の生活に密接な關係を有する町、村、郡、市、縣の如き自治團體、農會なり、同業組合なり、各種の産業組合なり、青年團なり、苟くも自分等の利害關係を自分等で研究して、善い方面に始末して行かうと云ふのである。

であるから、一本全體を一本の木として見る政黨の政見と、一本の枝ぶりをよくし、或は一本の根を先づよくし往かうと云ふ部分的に見て行く自治團體とは、其間に自ら異つた領分を有つて居る。自治體では、此根なり、枝なり、或は葉なり、幹なりを部分的に研究して之を發達させやがて、一本全體を立派に仕上げやうとするのである。一口に言へば、自治の振作から始めて國の土臺を固めてかゝり國家全體を各部共に鈞合よく健全に發達させなければならぬと思ふ。

### (三) 政黨の地盤と農村

苟くも政黨の首領であり、或は識者たるものは、自治と憲政との關係に就て、其れく注意して居るが、多數の黨員の中には、やゝもすれば政黨の地盤と云



ふ言葉に誤解があるのは如何にも残念である。

かく誤解を存するの結果は、いはゆる穩健でない手段や、或は合理的でない勢力を利用して、政治的權力に偏頗を來したり、或は黨派的の依怙沙汰によりて、公平なる態度を失ひ、地方の行政や經濟を左右し、之が爲に地方自治體の健全な生活、可惜政黨の犠牲にするばかりでなく、農會や、農工銀行や産業組合などの如き經濟殖産の領分までも荒すことがある。

(四) 地方の文化を進め經濟の發達を計ること

抑々自治生活の要素なるものは、國民が各自に公共的精神を涵養し、亦能く一致協同して相互に協力の美風を擧ぐることにある。言ひかへると地方團體の文化上並に、經濟の發展を促し、シツカリとした協同的の觀念によつて、國

民相互の福利を増し地方團體其者が能く調和して、國家の機能を活すのが目的である。此の意味に於て自治體は實に國民の憲政的活動の練習所であるから、自治生活の健全を缺いた所の國家は憲政の美果を結ぶことは六ヶしい。何んとなれば、自治生活にして振はない以上は他人と能く調和し共同するの思想を鍛ひ上げる基礎がないからである。

而して、以上の文化的、並に、經濟的の發展とは如何なるものであるかと云ふと、地方によりては其の代理的關係や、特殊の天産物等に就いて常に専門家や經驗家の意見をきいて、之を利用するに心を用ひ、また資本や勢力を巧みに運用し、例へば水利を用ふるとか或は從來其の地方に於て未だ多く利用されない天産物の新たな販路や利用方法を案出し或は從來よりもより以上に有益に使ふとか、又は勞力の餘りある所には新たに適當なる仕事を見出だすとか、資本



の足らぬ地方に之を補ふ道を講ずるとか、能く地方の状況に應じて工夫を加へ、現代の文明智識を利用して出来得る限りの方法を盡くして、個人的團體的經濟の發達を計る等のことである。

(五) 和衷協同の精神を發揚すること

また社會が進めば進むほど階級も複雑になり、種々の階級には其れれく特殊の利害關係を有つことになり、或る階級の利益と伴はなくなることもある、例へば地主と小作人、資本家と労働者、企業者と使用人等の如き階級的關係の間に生ずる利害の衝突である。

されば、此時に當り國家の綜合的の利益と矛盾しない範圍で、各階級の人々が和衷協同し、いはゆる團體の利益の増進に盡くすと云ふ公共的精神を着實眞

面目に發揮しなければ到底圓滿に福利を増すことは出来ぬ。

で、各階級から其れれく其の階級の利害を代表せしむるに適當にして、優良なる代表者を議員に選び出だし、他の代表者と商議せしむるの必要が起つて來る。然るに、今日の風潮はやゝもすれば、半人前の仕事をして、一人前の報酬を得んとする傾向があるが、宜しく一人前の仕事をして半人前の報酬に甘んずるの覺悟を存することが、和衷共同の公共的精神を發揮する上には必要である。

(六) 忠恕の教と共同の精神

之を社會現象に見るも、種々の不平や、或は就職難を訴へたり、或は不健全な社會黨の如きものを出だすのは、畢竟彼等が半人前の仕事をして一人前の報



酬を得やうとするからである。

孔子は人の爲めに謀つて忠ならざるかと言つて反省し、忠恕一貫の教を説かれたが、この忠恕と言ふことも之を露骨に言ひ現はすと、一人前の仕事をして半人前の報酬に甘んずると言ふ美しい高尚なる精神と其軌を一にするものである。

地方自治のことに當る人は勿論、將來自治體の一員となつて活動する地方青年は、斯る忠恕の美風を涵養して、堅實なる精神を以て、極めて眞面目に其の業務に従ひ、能く地方の自治體をして健全なる發達をなさしむるの素養を作らなければならぬ。

彼の青年の特性として情熱鋭敏なる所より動もすれば世上に言論を弄し、身を立てゝをるものを見ると、直ちに之を羨み、延ひて徒らに政論を上下するこ

とを喜ぶの風あるものもあるが、要するに是等の弊は深く戒めて之を矯めなければならぬことである。そして地方青年はよく其の郷里を愛し、又よく其の業を愛するの精神を涵養し、これを實行の上に現はすには、敢て艱難を辭せざるの覺悟がなければならぬ。

既に艱難を辭せざる覺悟さへあらば、亦能く、郷黨のために盡くし、一人前の仕事をして一人前の報酬に甘んじ、下らない非難や攻撃を物ともせず立派な人物として郷黨につくし、延いては其の公共的精神を、憲政の上にも現はすこととなる次第である。思ふに斯かる健全なる精神を有する紳士は、將來は今日の地方青年の間から益々出て來ることと思ふ。

(七) 健全に身心を發達せしむること



畢竟するに、青年は他日自治の民としては郷黨のために盡し、憲政の民としては、國家社會のために盡す相續者であるから、能く其の責任の重大なることを自覺しつゝ、今日に於て能く其の身體や精神の訓練に意を用へることが必要である。

即ち大和民族に固有するところの道徳思想を根本とし、之を明かに其の頭腦に注いで、近來の憂ふべき惡風潮に浸み込むで輕薄に陥らないやうに注意し勤儉、信義、忠實等の穩健着實なる諸徳を實行し、其の信念を堅くし眞面目に義に勇み公に奉ずる人とならなければならぬ。

殊に我國の青年は今日世界列強國が互に活動しつゝ、舞臺に立つてゐることを痛切に理解して、ますます堅忍持久、能く身體精神の兩方面に亘りて健全なる發達をなさむことを望む次第である。茲に地方自治に關し平生懷抱して居る一二

の意見を述べた次第である。



## 附 録

## 文裝的武備論

## (一) 武裝的文備を排す

今回の世界戦争が、世界列國に甚大なる刺戟を與へた結果或は之を以て世界回轉の一期を劃する事實なりとし、列國の國是が此の戦争の終結と共に新に大變轉を致すべしと豫想の下に、列國が將來平和主義によつて進むべきか、將來帝國主義によつて進むべきかを重大問題なりとして、論じつゝある者がある然し乍ら予を以て之を觀れば、斯の如きものは決して重大問題たらざるのみならず、單なる問題としても價値のないものである。

平和主義とは何んであるか、帝國主義とは何であるか。此の二者は、實に二個の相反せる極點にあるものである。即ち理解し易き譬喩を以て言へば、火と水の如きものである。水火が相争ふた場合に、果して其の何れが勝つかと云ふが如きは決して簡單に論斷さるべき問題ではないと同時に、又永久に決すべからざる問題である。或る一小局部の事實として觀れば、火勢が熾んにして水に勝つこともあり、又之れと反對に、水力が強大にして火に勝つこともあるが、然し全世界として見れば火の絶滅、水の涸盡なる事實は毫も存在しない。水と火の二物力は、要するに斯くの如く、相戦ひ、相牽制しつゝ、兩々共に存在して、萬有を燃焼し分解し、生命のエネルギーとなつて、吾人の前に絶えざる効用を示しつゝあるのである。然るに水火共の一方にのみ偏して、他を排せんと



するが如き事あらば其結果はさうであらうか、予は平和主義と帝國主義との關係も、之と同一理數の上にあるものと思ふ者である。

平和は固より愛すべきものである、故に平和主義者が云ふ如く、世界に永久の平和が來たり。全然戰爭の悲惨から人類が免れ得るならば、誠に欣ぶべく祝すべき事であるが、然し果して彼等の説く所の如く、絶対に戰爭を絶滅するこゝとが出来ると否やは、今日の世界的現象に照して見て、非常に大なる疑問である。近時世界列強のなす所を見るに、彼等は一手に平和の蜜瓶を捧げ乍ら、然も他の一手には鋭利なる劍を倍々研磨することを忘れないことを以て、准則としてゐる。此の准則は今日地球上に國をなす何れの邦國にも、通すべきものであつて、平和主義と帝國主義との二大塊を左右に有するダンベルの把柄を緊握して、之を巧みに動かすのが、列國の執るべき國是である。されば今日武器の

進歩が、日々に怖るべき新破壊力の増加を來し、劣弱なる武器を有する國は、到底他國の凌辱を免れざる時に當つて、平和主義のみに依つて、平和を維持せんとするが如きはこれ、實に愚中の愚と云ふべきものであつて、國家として斷じて採るべからざる政策である。即ち今後の日本は文裝的武備を以て其根本方針とし斷じて武裝的文弱を排し、一國の平和を保ち、一國の屈辱を避けて、倍々新文明を擴張すべしである。

(二) 科學の發達と破壊力の増進

要するに世間の所謂平和主義も、エンペアリズムも、共に一利一害を免れざるものであるから、其の一方に偏して之に醉へば、必ず弊害がある。極端に平和主義に心醉する者は萬國平和會議の勢力を過信し、將來列國間の紛争は、仲



裁々判所の裁判によつて決せられ、之に由つて戦争の慘過を絶対に避け得べきが如く思料して居るやうであるが、迷信もこゝまで來れば、寧ろ愛嬌がある。果して平和會議なるものに、それだけの實力があり得るものならば、第一回の平和會議以來十年の久しきに及べる今日、今回の如き全世界に亘る大戦亂の起ることは無い筈ではないか。ルーズベルトの如きは、戦争の起る毎に、これは世界最終の戦争だと言つてゐるが、其所謂最終の戦争の後から、又戦争が起つて居る而して嘗に其底止する所が無いのみでなく、漸次擴大する傾向がある。明治三十七八年に於ける日露の戦役の如きは、從々會て世界史上に見なかつた大戦であると言はれたが、然かも之れを今日の世界戦争に比すれば、殆んど兒童の鬼ごつこと同然である。斯く見來れば、將來科學の發達が其の度を増すにつれて次第に偉大なる破壊力を有する機械が現はれ戦争は々々大なるものとなる。

るのが必然の勢であつて、世に言ふ平和主義の實現の如きは、到底容易に望むべからざることである。故に現下の世界に立つて、國家の存立を維持し、其發展を圖るがためには平和に著せず、戦争に著せず、有力なる智勇兼備の文藝的武備を其根本主義として、立つことが必要である。

### (三) 軍國主義と獨逸

世間或は武備を盛にすることを以て、國家を強勇ならしむる唯一要件なるが如く誤解し帝國主義軍國主義の必要を、頻りに説くものもあるが、徒らに武備のみを盛んにして、國民の内部的實力が之に伴はなければ、結局國民は其實力以上に過大なる軍事費の負擔に疲弊することゝ成り、武装に文弱に陥ることゝなるから、斯の如き主義を極端に行はんとする國の前途は、蓋し推測するに難



からずである。之を世界進化の大勢に觀るに、科學の發達は、長足の歩みを以て危険なる武器を作らしむるに至り、平和を破壊する傾向の發明が漸次進歩する所を見れば、造物者の眞意も亦結局世界の平和を破壊し盡すにあるが如くであるが、然も其反面に於ては、破壊的武器が續々進歩した形式を以て現はれると同時に、更に之を防禦するがための發明も出現しつゝあるのだから、兩者が其の力を相殺する結果は毒を以て毒を制するの形となり、世界の平和に及ぼす危険は増大しないことになつて居る。乃ち此の點よりして觀れば、造物者の眞意は決して平和の破壊に非ずして、矢張戦争の癡絶、平和の保持といふことが、其の所期する目的であるとも云へる。

されば平和主義といひ、帝國主義と云ふものも、其根底に於ては、甚だ無意義なものであつて、恰も哲學者の遊戯的空論と擇ぶ所はない。予は斯の如き空

論を現實の國家政策に結びつけて論ずる程、愚劣極まる事はないと思ふ。斯の如き論議を闘はす者は、前にも言つた通り、要するに火水の喧嘩である。何年

何十年論じ續けても決定を見るべき問題ではない。

尤も一部の世人は獨逸を帝國主義軍國主義の代表者と觀て、今回の世界戦争に獨逸が敗衄すれば、或は之と同時に帝國主義軍國主義が廢滅して、世界は一律に平和主義を謳歌するに至るであらうと云ふ様な意見を抱いて居る者もあるやうであるが、獨逸は負けても勝つても、將來は大いに發展するであらう。獨逸の科學及び藝術は、人類生活と極めて密接なる關係を持つてゐることは、他國人の推測し得られない點であつて、日本などの歐洲文藝を論ずる人々の中にも、恐らく此間の消息を理解して居る者は少からうと思ふ。吾人は日本人が獨逸の科學及び藝術の根底に横たはる此の大なる力を覺らずして、妄に獨逸の前



途を論ずる者の多いことを、甚だ嗟歎せざるを得ない。

其他の方面に於ても、日本人は未だ獨逸を眞に理解して居ないことが多い。彼の三國同盟に於ける伊太利が、獨逸と共に今回の戦争に加はらなかつたことに就いても、日本では頻りに獨逸の違算云々と云ふことを唱へたが其實獨逸に於ては、既に開戦前に於て、參謀總長たるモルトケと多數の學者たるパーローだの、間に伊太利の態度に關する議論が闘はされ、伊太利が今次の交戦に參加し得ざることは、其の時に於て察知せられてゐたのである。然るに之れを知らずして、妄りに違算呼ばはりをなすと云ふが如きは、何たる迂闊の事であらう。斯の如きことでは、今後果して列國との激烈なる競争場裡に立つて、事の宜しきを制することが出来るかどうか國家の前途のため、甚だ憂ふべき事である。

(四) 自己を忘るゝ勿れ

吾人は此意味から言つて獨逸が如何なる主義を採つて居ようが、其主義が如何にならうがそんな外的な思想の問題よりも、もつと内部的な透察眼を以つて、獨逸の中心生命が如何に動いてゐるかといふ事を充分に理解することが必要であらうと思ふ。そして日本自身としては、大和民族の根本生活に、國家政策の基礎を置いて、敢然として自己團體の要求の下に進むべしである。獨逸の眞似をして帝國主義に感染するのも不可なれば又米國に同じて平和主義に赴くのも不可である。

一國としては飽くまでも一國の自己がなければ成らないアングロサクソンの精神はアングロサクソン民族にして初めて理解することが出来、日本民族の精



神は、日本民族にして初めて理解さるべきものである。然るに日本人が、近來漸く自己を忘れて、他國の輩に倣はんとし、他國の力を頼んで、平和主義を採れば萬國平和會議で助けてくれるとか、他國の指導に従つて戦争をすれば、萬一の場合に其國が救援してくれるとか云ふ様な考へを持つものがあるのは、其根本に於て誤れるの甚だしきものである。予は日本のために、斯る思想の存在を痛嘆するものである。

## 官僚政治論

### (一) 官僚政治と如何

本問題を論ずることは、學者の任であつて我輩の最も短所とする所である。然れども、僧侶若しくは傳教師が、必ずしも宗教の神髓を得たものとは云へない。俗人中にも、其の宗教の相を得るもの、亦無きにしも非ずで、一方より見れば、亦千慮の一失を補ふに、千慮の一得を以てすることもある。必ずしも賢者常に賢にして愚者常に愚なりと云ふことは出来ない。故に或は達人の譏を免れないかも知れぬが、しばらく我輩俗人の所見を述べやう。

近來我國に、官僚政治と云ふ言葉が盛んに行はれる。此の官僚と云ふ名は、



最初は藩閥若しくは軍政を意味したものであるか疑はしかつたけれども、近來用ゐらるゝ所のものは外國語のビュロークラチー、若しくはビュロークラチスムスの語を「官僚政治」と翻譯するより來つたものゝやうに察せられる。此の如く官僚なる名稱は外國語の翻譯より來つたがために、又各國に於て用ゐらるゝビュロークラチスムスなる語の意義と多少の相違が有るに依つて、各々轉用上異つたる意義を表彰することを免れないのである。例へば、英國に於ては、ビュロークラチーなる語は、繁文縟禮の他形式に失するやうな、忌むべき政治を主として表彰するが如きものであり、又獨逸及び其の他の國に於ては、主として一長官の下に一定の組織機關を有し、多數の屬僚を率いて整然たる事務を處理するの意義を表彰するが如きものである。斯う云ふ風に、同一の語なれども、其月ゆる處の國に依つてそれぞれ差異がある。併しながら、

此れ等の點に亘つて委しく議論を試みることは、固より我輩の本分にも非ず、又本旨とする所でもない。我輩は唯だ官僚政治の原語にも斯様の差異あることを一言して置く丈けに止める。

世間の官僚派若しくは非官僚派の立論の上に就て見るに、官僚政治其のものを如何に解釋して居るかは、甚だ不審を免れない觀がある。或は官僚政治其のものを眞に了解して居らぬのではなからうか。甚しきに至つては、所謂官僚派にして官僚と云ふ意義を詳にせず、又所謂非官僚派にしても此れと同様のもの有るかの疑を免れないのである。何となれば近く「官僚政治」出版後の此れに對する批評若しくは議論に徴して見ても、此事實は甚だ明で、現在の如く、官僚非官僚の説が盛んに行はるゝ時に當つては、「官僚政治」の出版は其の講究に資すること甚だ大なることを我輩は喜んで居る次第である。我輩は、此れに對



して完全なる識見を備ふるものだと自ら云ふのではない。併しながら、世間の此れに對する知識の甚だ幼稚なるにも、亦驚かざるを得ない點が尠くない。此れより進んで本論に入るに先立ち、尙ほ一言すべきは、官僚政治なる譯語の一事である。

## (二) 官僚政治の意味

抑々官僚政治と云ふ譯語の穩當であるか何うであるかは、我輩の最初より疑ふ所である、然れども世間に行はるゝ官僚と云ふ字は、大部分はビュロークラチーを翻譯したる意義を有することを認めたる故に、なまじい他に新しい譯字を採用するよりも寧ろ學者として一見識を開く主眼でもないから、俗に隨つて世間慣用の譯語を採用したに過ぎないのである。ビュロークラチーなり、

ビュロークラチスムスなり、語原學上のことは、此處に主たる問題ではないけれども、順序上、一言此のビュロークラチー若くはビュロークラチスムスの語原に説き及ばざるを得ない。其の語原より言へば、寧ろ官僚政治と譯するよりも、卓上論病或は机上論病とするか又は屬僚政治と譯するか、若くは官房政治と譯する方が宜いか等のことは、彼の「官僚政治」の翻譯の際に種々講究を重ねたのであるけれども、此の世間慣用の俗字に隨つて官僚政治とする方が、却つて理解に便ならんといふ點より、此の如き譯字を下した次第であつて、我輩は、固よりビュロークラチスムスは、官僚政治若くは官僚政治病と云ふ意義になりはせぬかといふことを考へたのである。此、ビュロークラチスムスなる語は、ビュロー及びクラチーと云ふ二つの語と、イスムスなる語尾とによつてなつてゐる。而してビュローなる語は、元と佛語ビュ



ルと云ふ卓子掛の名より分れ來つて、遂に事務室又は官衛役員及び其の執務方法を意味するに至つたのである。而して、クラチーなる語は支配の意味を有してゐるのである。其の語尾のイスマスは、頗る説明に苦しむものであつて、多くの學者にも尋ねて見たが、唯だ此の語は、事物を總括して一定の主義を抽象的に表示する場合に用ひる語尾であると言ふに過ぎないのである。拉丁の「イス」なる名詞の語尾に用ひらるゝ語より來つた。此の語は拉丁にも希臘にも、語原として認むべきものであつて、イスマス若しくはイスマス、アスマス若しくはアスマスと云へる用語の跡があると聞く。例へば、色素缺乏病と云ふのはアルビニズムと云ひ、此れに類する病的意味を含んでゐるものが尠くない。又何等左様の病的意味を含まずして、此の語を用ひるものも亦聞かないではない。モニスムスといふのは、一元論と云ふ意義であつて、哲學上、宇宙一切の

事物を凡て一つの原因より説明せんとする一元説を意味するのである。此れは皆人の知る所である。併し、既に此の一元説と云ふ一定の意義とか主義とかを抽象的に總括する場合には、動もすれば中庸健全の美を失つて、偏僻なる確執の凝塊の甚しきに陥る氣味を有するやうになるかの如く察せられる。又他に例を挙げれば、アグラリズムスといふことは（農業主義と譯す）、商工業の利害を顧みずして、農業上の利益を促進せんとする經濟學上の見解を示したものであつて、此れ亦偏僻確執を意味するの嫌ひなきに非ずと察せらるゝ。是に於て我輩は此のイスマスなる語を以つて、既に一定の主義を抽象的に總括して示すに當つては、一種の確執を生ずるの嫌ひを免れないもの有らんかと推察するものである。故に、ビュロークラチスムス即ち官僚政治と我輩の譯した處のものは、官僚政治の病若しくは確執的の弊を意味することを免れないであらうかと



想察せられるのである。

### (三) 官僚政治の歴史

世にカタマリ法華と云ふことが有る。カタマリ法華コゲクサイと云ふこともある。宗教にせよ、又其の他の學理にせよ、一定の主義を抽象的に示すに當り又其の主義や宗教を信仰すること益々深く益々堅くなる場合に於ては、必ず此の一定不動の意義がなければならぬと云ふことは、是れは穴勝排斥すべき事柄ではない。故に、カタマリ法華はよろしいが、コゲクサイ臭氣を去ることを勉めなければいけぬと思ふのである。此の間の消息を能く解釋することは、今日の如くビュロークラチスムスが、官衙と云はず、社會と云はず、政黨と云はず、總ての人生生活の組織的機關の部分に蔓延して、缺くべからざる執務の法

則と共に擴がつたる場合に於ては、能く健全なる官僚政治の發達をなさしむる爲めに甚だ必要であると我輩は信するのである。此に我輩の所謂官僚政治の意義は、官衙、會社、政黨、其の他の團體に於ける執務方法を指す意味でいふのであるが、此の言語は又一方には各自の利益のみを圖つて、人民又は社員の不利益をも顧みず、又國民全體の損害をも顧みず、大なる勢力を以つて實行する煩雜なる手続き若しくは杓子定規に仰ぎ、又は緩漫にして事務の敏活を缺くもの意味する刺語として批評的に使用せらるゝ場合も固より尠くない。今の官僚政治を非難する人は、此の如き意味を以つて非難するのである。此の非難は固より當然で、官衙、會社、政黨、其の他の團體に對しても、此の如き弊を除く去せんことを希望するのであれば、我輩の固より同感を表する所である。然れども、官僚政治そのものは、全く執務方法に對する軌近の専門的又文明的の機



關若しくは機械なることは、争はれない所の事實である。何となれば、官僚政治に反對したる所の自治機關——此の自治機關なるものは、民主政を意味する所のものなるに拘らず、獨り日本のみならず自治の行はるゝ所の各國に於て、近來名譽職を以つて其の事務を取扱はしむることの甚だ不結果であつて、人民の不利益を醸し損害を惹起すこと尠からざることを悟り、煩雜なる手續を避けんとすることが出来ないのみか、却つて紛擾を醸し敏捷に事務を處理せずして緩漫に亘るの虞れあることを知つて、有給の自治體職員殊に市町村長を置かざるを得ざるやうになつて來た。況んや、其の部下に屬する所の職務を執るものに於ては、勿論官僚的機關に頼らざるを得ないのである。大會社や政黨に於ても、亦同様である。近來、社會民主黨、即ちソーシヤル、デモクラチーの黨務を執る有様を見るに及んで、平生此のビュロークラチー即ち官僚政治を非難

して居るに拘らず、其擧に倣はざるを得ないことが證せられる。あの官僚政治の不健全なる病的の模範を社會民主黨の黨務に於て見るに至ると云ふことは既に識者の一般に認むる所である。故に、官僚政治其のものは、或る政黨員若しくは政黨に於て、主として攻撃し又排除する所のものとなし、或る新聞社に於ては、日々其の紙上に官僚政治攻撃の文を草し、或は出で、其の意見を演説しつゝあるに拘らず、其の政黨若しくは新聞社の内部にあつては、益々ビュロークラチーを以て支配し、否、唯だ此れに依つて支配するのみならず、ビュロークラチーの最も甚だしい弊害に陥ることだに顧みずして、其の弊害を助長する度に至つては居らぬであらうか。此れは日本のみではなく、外國の形勢に於ても亦同様であると云ふことは我輩の深く信する所である。故に、世の中に我身の臭さへ我れ知らずと云ふ諺の如く、ビュロークラチーを攻撃して居



るものが、自ら官僚政治の弊に陥ることの議論をなし、又事實を行ひ、斯の如き事實を行ふ方法を講じつゝあるが如きものは尠くないのである。現に我が議院に於て従來立法上の議事に議院から官僚政治の弊を脱すること能はざるは已に其例に乏しくない。我輩は、社會的疾患の治療のために、彼の「官僚政治」を誣出し、之を發刊して、公益上共に其弊を絶ち其害を除き、成るべく健全なるビュロークラチーの發達を企圖せんとするものである。

然るに、世間には、此のビュロークラチーの弊害は、官吏のみにあつて、其の他には無いもの、様に考へ、官吏よりは更に甚だしきビュロークラチーの弊害が、政黨社會等の各部に於て存在して居ることを知らざるかの觀を免れぬ事實の多いのは、我輩の甚だ遺憾とする所である。又此のビュロークラチスムスの譯語が「官僚政治」と有るがために、此の弊が官衙にばかりあるもの

と信じて居るものが、世間には大多数である。又ビュロークラチスムスを譯するに、官僚政治の名を以つてしたのは、此の如き弊害を目標に置くがために、之を指摘するに便にして、其の刺語が最もよく功を奏すると云ふ點からして、わざとこの名を用ひたることを知らず、却つて此の弊害が官衙にのみあるかの如き迷信を生ぜしめたのではないかと思はれる。我輩は、今日、浪人生活であつて、官衙を辯護するの任に當るべきものではない。併しながら、官衙の外にあつて、我々人類の生活活動の上に就て此のビュロークラチスムスの弊害の存する所甚だ大なることを思ひ又之を攻撃し之を排除することを企て、居る人々が、其病根の伏在する所の場合、唯だ一の官衙に止まつて他に一の大なる局面に於て此の存在して吾人の活動を妨ぐることを知らざるに於ては、此の社會的疾患を治療して福利を獲んとするに就て、甚だ無策の狩獵を企てる



ものではないかといふことを疑ふのである。

政治的の演説若くは新聞紙上に於て、或る刺語を鑄造して流通せしむるの風は、決して日本に許り行はれるものではなく、世界各国皆同様の事實がある。故に、此の種の語は、一時盛んに流行して、遂に其れ自ら死滅することの例は尠くない。我國に於ても、藩閥、黨閥等の語も一時盛んに行はれたけれど、此の刺語の用は次第に陳腐に歸して、今や官僚なる刺語が代つて應用せらるゝに至りしかの如き觀がある。此れ等は、總て前に述べた所のカタマリ法華より生ずる焦臭さき臭氣に外ならないものである。苟くも健全に發達しつゝある大國民の氣象の煥發せらるゝときに於ては、此の種の語の用法が随つて生じ随つて變じ更に復た随つて消滅すべきものであらうけれども、其の當時の流行として其の人を茶毒することの甚しき弊に陥ることは恐るべきものであるから、識

者は此に十分の注意を拂ふことが必要であらうと思ふ。又甚しきに至つては自己が政府の官吏に登用せられざる場合に於ては無暗に官僚政治を攻撃し、一旦官吏となるに及んでは、翻然として熱心に之を辯護するが如き輩もあるのである。尙ほ此の官僚政治の意義を或る一面より見ることをためには官僚政治攻撃の或一幕を、此に開いて紹介することも、全く興味の無いことではなからうと思ふ。

#### (四) 官僚政治の根本問題

英獨の間に官僚政治非難の面白い一幕がある。併し英獨兩國の市町村を比較する時、英人が獨逸の官僚政治を非難することの甚だ當らざること認めしむるものが有る。英國に於ては市町村長の任免の權は政府にある。此れに反して



官僚政治と云はるゝ所の獨逸に於ては市町村長は公民の選舉によるのである。英國にては官僚の會計検査院によつて、郵便税の支拂に至るまで監督を受けるが、此れに反して獨逸に於ては、市町村の行政は財政上の自由を許して居る。元來、官僚政治に對する根本的非難は、市町村制を指すに非ずして、國務大臣が政黨の希望によりて任免せらるゝことのなき獨逸の主義に反對したものであるが、併しながら、以上の市町村例に對して見ても、又疾病保險改革が最初はじめて英國に發見せられし事實に徴して見ても、官僚的と云はれる獨逸帝國に於ては、既に各種の勞働者に對して、自治權を有する疾病保護組合を設けしめて居るに反して自由主義の英國に於ては或る種類の勞働保險經營に對して、勞働者の參加を許さないが全く官僚的の政府機關を以つて處理せしむるが如き制限が有る。此れ等の事實に徴して見ても、官僚政治なる言葉は、決して英國の

如き國にも行はれず、議會政治の所にも行はれず、又政黨内閣の所にも行はれず、政黨の事務にも行はれないで、却つて之に反する處の弊害をなすものであると事柄が、全く事實に通せざるもの、言たることは、甚だ明らかではないかと信せらる。

嘗て此の官僚政治のことに就て、我輩は師事する所の或外人に質したことは一にして足らぬ。其の中に、一二人の批評する所によれば、日本に於ても、官僚政治主義を攻撃する唱道者中には、四つの區別が有るやうだと言つて居る。其の一は各種の政治家、其の二は國家の補助に依つて地位を進め、今日此の補助を要せずして猶は一層有利の事業を營むことを得んとする所の商工業者、其の三は國家の官吏に登用せられざる不平者、其の四は日本に於けるマンチエスター學派の英字新聞紙、及び他の官營事業のために營業上に不利益を被